3 物語1

単元のねらい

◆『竹取物語』に描かれた人物の心情などを読み取る。
◆文語助詞の種類と用法を理解する。
◆昔の人が月に込めた思いについて調べ、発表する。
・平安時代の仮名文で書かれた伝奇的な物語の文章を読み味わい、人物の心情を読み取らせる。
・文語助詞のうち、特に現代語と異なる助詞について学び、今まで学習した文法的知識を整理して、体系づける。
・古典文学の中で月がどのようなものとして捉えられているかを調べ、昔の人が月に込めた思いについて発表させる。
物語の原文を読み解く力を養うとともに、昔の人が月を見て何を感じていたか、どのように歌に詠んできたかを主体的に学ぶことをねらいとしている。

単元の構成

「竹取物語」から二教材を取り上げた。物語冒頭「かぐや姫の生ひ立ち」では、次々に展開する物語の流れを追い、文末表現にも着目する。物語後半部「かぐや姫の嘆き」では、会話文の構成と巧みさに気づかせ、登場人物の心情を読み取らせる。
「古文を読むために5」では、助詞、注意すべき言葉遣いについて説明している。古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりについて学習できる。
「古文の窓2　古典文学と月」では、新暦と旧暦の違いを解説し、月を詠んだ和歌や俳諧、月にまつわる文化習俗を紹介している。
「単元の言語活動3　月が詠まれた和歌を鑑賞する」では、月の呼び名を調べ、月が詠まれた「百人一首」の和歌を鑑賞する。調べ学

習やグループでの話し合いを通じて、主体的に学び、相互に学びを深めることができる。

物語1

教材のねらい

1 選定の理由

「竹取物語」の中から「かぐや姫の生ひ立ち」「かぐや姫の歎き」の二教材を学ぶ。「竹取物語」は現存最古の物語文学であり、日本の伝統的な言語文化を理解するうえで重要な作品である。幼い頃から慣れ親しんだ物語の原文を読むことの意義は大きく、また、生徒の多くが物語の概要を知っていて、内容理解の負担が少ない分、古文読解に必要な文法や語彙の理解の定着を円滑に進められる教材である。

「単元の言語活動３　月が詠まれた和歌を鑑賞する」は、「竹取物語」の中でも重要なキーである月が詠まれた和歌を鑑賞し、古来の日本人の月に込めた心情についての解釈を深めることをねらいとしている。

2 指導のねらい

「竹取物語」では、話の内容に合った音読ができるようにする。重要古語や文法事項を確認しながら、流れを追って古文を読解するよう指導したい。また、かぐや姫や翁の行動や心情がどのように表れているのかを読み取り、登場人物の人間性をつかむ。そのうえで、作者が人間界と天上界を対比させながら、悩み多いものの、人間の情愛こそを最上として描いていることに注意して、作品を鑑賞していきたい。

「単元の言語活動３　月が詠まれた和歌を鑑賞する」では、月が詠まれた和歌を鑑賞し、日本人が月に託した心情についての解釈を深めさせたい。

3 単元の目標

目標について、別表「単元の目標一覧」をご確認ください。

4　評価規準

学習指導要領との対応等	評価規準例	〔知識・技能〕							〔思考力・判断力・表現力等〕			
		(1)ア	(1)ウ	(1)エ	(1)オ	(2)イ	(2)ウ	(2)エ	B(1)ア	B(1)イ	B(1)エ	B(1)オ
	言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解している。	○										
	我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしている。		○									
	文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解している。			○								
	掛詞などの我が国の言語文化に特徴的な表現の技法とその効果について理解している。				○							
	古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解している。					○						
	古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや、古典特有の表現などについて理解している。						○					
	時間の経過や地域の文化的特徴などによる文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解している。							○				
	「読むこと」において、文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えている。								○			
	「読むこと」において、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈している。									○		
	「読むこと」において、作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めている。										○	
	「読むこと」において、作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深め、我が国の言語文化について自分の考えをもっている。											○
	かぐや姫の生ひ立ち	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	かぐや姫の嘆き	○	○	○		○	○	○	○	○	○	
	古文を読むために５	○	○	○			○	○	○			
	古文の窓２					○			○			
	単元の言語活動３	○				○				○	○	○

進んで「竹取物語」に描かれた人物の心情などを読み取り、文語助詞の種類と用法を理解し、学習課題に沿って、本文中から過去や完了の意味を持つ助動詞を探し、本文のどの位置に現れるかを確認して、物語の構造を捉えようとしている。	進んで「竹取物語」に描かれた人物の心情などを読み取り、文語助詞の種類と用法を理解し、学習課題に沿って、かぐや姫が「この国」を去ることを嘆き悲しむ理由を考えようとしている。	進んで「竹取物語」に描かれた人物の心情などを読み取り、古典文学と月の関係について理解し、今までの学習を生かして、月が詠まれた和歌を鑑賞し、昔の人が月に込めた思いについて調べ、発表しようとしている。	〔主体的に学習に取り組む態度〕
○			
	○		
○	○		
		○	
		○	

■言語活動例との関連（【　】は関連する指導要領の言語活動例）

単元の言語活動３　月が詠まれた和歌を鑑賞する【〔思・判・表〕B⑵オ】

物語1

指導計画案

指導上の重点目標	学習活動	指導上の留意点
【かぐや姫の生ひ立ち】 1 「竹取物語」の概略を理解する。 2 内容にふさわしい音読をする。 3 古語の意味を正しくつかみ、内容を理解する。 4 かぐや姫が人間と異なる点、現世とは異なる物語空間を味わう。 5 話の内容を整理し、登場人物の行動と心情を読み取る。	**導入** ❶「竹取物語」について知っていることを発表する。知技 ❷「竹取物語」の全体の構成・展開について理解する。	❶何人かの生徒に発表させ、黒板に整理していく。 ❷❶で整理した内容を使い、誕生・求婚・昇天の三部構成になっていることを理解させる。
	展開 ❶「かぐや姫の生ひ立ち」を音読する。思判表 ❷教師の範読を聞きながら、大意を押さえ、解釈が難しい部分を指摘する。知技 ❸古語の意味・用法、文法事項に注意しながら、現代語訳する。（「古文を読むために5」を参照する）知技 →**「言葉と表現」**1 ❹当時の風俗・習慣について理解を深める。思判表 ❺かぐや姫が普通の人間と異なっているところを指摘する。思判表 →**「学習のポイント」**1 ❻翁のかぐや姫に対する行動、かぐや姫の様子を現代語訳を参考にまとめる。思判表 →**「学習のポイント」**2	❶指名して、ゆっくり大きな声で音読させる。 ❷難解なところは少ないので、現代語と形は同じでも意味の異なる語（「うつくし」など）に注意させる。 ❸重要古語は辞書を使って意味を確認させる。 ❹「髪上げ」「裳着」などの風習にどのような意味があったか説明する。 ❺❻現代語訳をしながら、ポイントを箇条書きにさせていくとい。

【かぐや姫の嘆き】

1 「かぐや姫の生ひ立ち」からの経緯を理解し、物語の状況を把握する。
2 心情を表した会話文にふさわしい音読をする。
3 敬語や省略に注意して、内容を理解する。
4 登場人物の行動と心情を読み取る。

まとめと発展

❶「五人の貴公子の求婚」について概略を聞き、物語の全体像をつかむ。

❷本文中から過去や完了の意味を持つ助動詞を探し、本文のどの位置に表れるか、確認させる。知技 主態
→「言語活動」1

❶人名などにこだわり過ぎず、概略を説明する。

❷「かぐや姫の嘆き」を読解・鑑賞するうえでも必要なので、生徒の興味を引くよう要点を説明しておきたい。

❷「けり」「たり」「ぬ」「つ」の四つの助動詞ごとに、どのような文脈の中に現れるかを確認させ、助動詞の使い分けについて理解を深めさせる。

導入

❶「かぐや姫の生ひ立ち」の後、五人の貴公子と帝の求婚を退け、最後に昇天に至る場面であることを知る。知技

❶指名して、ゆっくり分かりやすく音読させる。

展開

❶「かぐや姫の嘆き」を音読する。思判表
→「言葉と表現」1

❷敬語や省略に注意しながら、現代語訳する。知技

❸かぐや姫の言葉を参考に、かぐや姫の悲しみの理由をまとめる。思判表
→「学習のポイント」1

❹翁の心情の変化を読み取る。思判表
→「学習のポイント」2

❺「月の都」と「この世界」との違いを考える。思判表

❷言葉を補う必要のある箇所についてはきちんと指摘し、敬語については基礎的文法事項を解説する。

❸月の都の人間で、帰らなければならないこと、それがうれしくないことを押さえさせる。

❹翁の行動を押さえ、心情を考えさせる。

❺時間のスケールの違いを押さえさせる。

まとめと発展

❶かぐや姫の人間性がどのように描かれているか、「かぐや姫の生ひ立ち」と比較して考える。知技 主態
→「言語活動」1

❶非情で神聖な月世界の人が思いやりあふれる人間に成長していることに気づかせる。

【単元の言語活動３　月が詠まれた和歌を鑑賞する】

1　月の異名を調べさせる。
2　「百人一首」で月が詠まれた和歌を鑑賞させる。
3　グループごとに担当した「持ち歌」について生徒自身が主体的に理解を深め、文章にまとめさせる。
4　「持ち歌」についてわかりやすく発表する。
5　発表や作品に対する感想を持たせ、各自で課題以外で月が詠まれた和歌を鑑賞させる。

導入

1 月の呼び名を調べる。知技
❶「陰暦月齢表」（三五八ページ）を見て、日付ごとに月の呼び名がどのように変わるか、確認する。
❷「立待月」「居待月」「臥待月」の呼び名の意味を調べる。
❸「有明の月」とは、どのような月を言うのか、調べる。

1 古語辞典、資料集などで、月の呼び名と月の出の時間帯の関係を確認させる。
有明の月と呼ばれる月の日時だけではなく、文学的にどのようなイメージと結びついているかを確認させる。

展開

2 「百人一首」の和歌ア～ウについて、①～③の手順で鑑賞する。思判表
❶ 六つのグループを作る。グループA・Bのメンバーはア、グループC・Dのメンバーはイ、グループE・Fのメンバーはウを「持ち歌」とする。グループ内で「持ち歌」について、「現代語訳」「月がどのようなものとして詠まれているか」を話し合い、文章でまとめる。
❷ グループを解体し、「持ち歌」ア・イ・ウのメンバーを必ず含む新しいグループを作る。新しいグループ内で、①でまとめた各自の「持ち歌」についての文章を発表する。
❸ ア～ウを比べた感想を新しいグループごとに発表する。

2 「持ち歌」の内容やポイントが伝わりやすいように文章を工夫する。
他の人の「持ち歌」についての発表を聞き、感想をメモする。

まとめと発展

3 「百人一首」の中から、ア～ウ以外で月が詠まれた和歌を一首選び、「月がどのようなものとして詠まれているか」について考え、鑑賞する。主態

3 1 2 の学習を踏まえて、各自が「百人一首」の中から月が詠まれた歌を一首選んで鑑賞し、和歌の中で月がどのようなものとして詠まれているかについての理解を深める。

竹取物語

作者

作者は不明。「竹取物語」が漢文訓読語を交えた和文で書かれ、神仙譚をはじめとする漢籍、仏典、日本の歴史や地理に関する知識が活用されていることから、男性文人の手になると見るのが通説である。源順（みなもとのしたごう）、源融（みなもとのとおる）、僧正遍昭（そうじょうへんじょう）、紀長谷雄（きのはせお）などの諸説があるが、いずれも確証を欠く。この他に、空海の漢文原作を遍昭が和文化したとする説、斎部（いんべ）氏、漆部（ぬりべ）氏、賀茂氏といった特定の氏族の中で作られたとする説もある。

出典

▼**底本**

新日本古典文学大系「竹取物語　伊勢物語」（堀内秀晃・秋山虔校注、平成九〔一九九七〕年、岩波書店刊）によった。

▼**諸本**

「竹取物語」は平安時代前期に成立したが、現存伝本は室町時代末期までしかさかのぼれない。伝本は通行本と古本とに大別される。新日本古典文学大系の底本である天理図書館蔵本（武藤元信氏旧蔵本）は、天正二十（一五九二）年の書写であり、通行本を代表する伝本の一つである。

▼**書名**

一般に「竹取物語」と呼ばれるが、「竹取翁物語」「竹物語」と題する伝本もある。また、「源氏物語」では、「かぐや姫の物語」（蓬生巻）、「竹取の翁」（絵合巻）と呼ばれる。

▼**成立**

九世紀末から十世紀初頭の成立とされる。かぐや姫の昇天の部分に、「六衛の府（つかさ）」「頭中将（とうのちゅうじょう）」など、弘仁（こうにん）年間（八一〇〜八二四）設置の官司・官職名があるので、それ以降の成立であることは確実だが、仮名文字の普及、和歌における掛詞・縁語の発達を考慮すると、成立の上限は、貞観（じょうがん）年間（八五九〜八七七）頃だと言える。また、「大和物語」第七十七段に「竹取物語」を踏まえた和歌があり、これが延喜（えんぎ）九（九〇九）年の作と推定されるので、その頃には成立していたと言える。さらに、物語末尾に富士山の煙が「いまだ雲の中へ立ち上る」とあるのに対し、「古今和歌集」仮名序には「今は富士の山も煙立たずなり」とあることから、「古今和歌集」成立の延喜五年が成立の下限とも見られる。

▼**内容**

「竹取物語」の内容は、大きく四部に分けられる。天人女房譚と認められるかぐや姫の出現と退去との間に、五人の貴公子と帝による求婚の物語が挟み込まれる形である。

(1)かぐや姫の生い立ち（天人女房譚・小さ子譚・致富長者譚）
(2)五人の貴公子の求婚…五つの難題（求婚難題譚）
　①石作（いしづくり）の皇子……仏の御石の鉢

②庫持の皇子……蓬萊の玉の枝
③阿倍の右大臣……火鼠の皮衣
④大伴の大納言……竜の頸の珠
⑤石上の中納言……燕の子安貝

(3)帝の求婚（求婚譚）

(4)かぐや姫の昇天（昇天譚・天人女房譚）

天人女房譚は、天女が天から降りて来て地上の人間とともに暮らすものの、後に別れるという話の型である（羽衣伝説の類）。かぐや姫は最終的に昇天するので、姫が出現し、翁・嫗の養女となる部分も天人女房譚と捉えられる。さらに、非常に小さく生まれた子が特別な能力を持つ小さ子譚（「一寸法師」など）、異界の者や動物を引き受けた人物に富がもたらされる致富長者譚（「洟垂小僧様」など）といった物語の典型的な型が冒頭部を形作っている。

姫が成長すると、物語は求婚譚に移行する。翁は、特別熱心に求婚する五人の貴公子の一人と結婚するよう、姫に勧める。姫が愛情を測るためとして出した五つの難題は、どれも実在すら不明な品物の要求であった。通常の難題求婚譚と異なり、女性が求婚者を退けるための難題である。かぐや姫は、石作の皇子の仏の御石の鉢はすぐに偽物と見破るが、庫持の皇子が用意した精巧な偽物には苦労した。間一髪のところで工人たちが玉の枝製作の報酬を要求しに現れ、姫は助かる。阿倍の右大臣は偽の皮衣を買わされていた。大伴の大納言は、自ら竜の頸の珠の探索に船出するが、嵐に遭い、かぐや姫を恨む。石上の中納言は、子安貝を得るため高所に昇って転落し、死去する。手にしていたのは燕の糞であった。貴公子たちの物語は身分の順に配列され、各々人間の愚かさを描く。一方、かぐや姫にも変化が生じ、中納言の死には同情し、自ら和歌を贈った。江戸時代の加納諸平以来、貴公子たちは「日本書紀」「続日本紀」に見える実在人物に基づくと考えられている。五人が皆失敗をし、最も身分の低い中納言だけが姫の同情を得られた点に物語作者の社会批判が読み取れる。また、難題譚の部分は作者の独創性が高いと認められていたが、チベットで採取された民話「斑竹姑娘」に、類似した五つの難題があることが一九七〇年代になって知られた。両者共通の原話の有無などは解明されていない。

かぐや姫の評判を聞いた帝は、内侍中臣房子を翁の家に派遣する。姫は、居丈高な態度の内侍と対面せず、勅命を畏れ多いとも思わない。天皇の権威に屈しない姫の言動にも、作者の批判的想像力がある。いったんは姫の意向を尊重した翁も、帝から官位を条件に出され、狩の行幸を装って帝が直接来訪する計画に同意する。姫は窮地に立たされるが、帝に袖をつかまれながら、「きと影にな」って拒み通した。帝が無理強いをしないからもとの姿に戻るよう懇願すると、姫は応ずる。超人的な力で主張を通しつつも、相手に憎まれず愛される、しなやかな人物像がある。姫と帝との間には、三年にわたる手紙の往来があった。

天人女房譚の型に沿って、物語は終末部へ進む。月を見て嘆くようになった姫は、八月十五夜が近づいてようやく、自分は月の人であり、十五夜に帰ると告白する。翁の訴えを聞いた帝は、兵士二千人を派遣するが、やって来た月からの使者たちに対しては無力であった。かぐや姫は、翁・嫗に別れを告げ、帝に不死の薬

と手紙とを残して去る。不老不死の月の世界に帰るよりも、老いていく翁たちとともにいたいというかぐや姫であったが、天の羽衣を着ると人間的感情を失って昇天した。翁たちは悲嘆に暮れ、帝は、最も高い山（富士山）の頂上で、薬と手紙とを焼かせた。

このように、「竹取物語」は種々の話の型を組み合わせて成り立つが、さらに「…さる時よりなむ、「よばひ」とは言ひける」など、節目節目に語源譚の形も取り込んでいる。

参考文献

❊教師用

▽注釈書

日本古典文学大系「竹取物語　伊勢物語　大和物語」
阪倉篤義他　岩波書店　昭三十二

新日本古典文学大系「竹取物語　伊勢物語」堀内秀晃・秋山虔
岩波書店　平九

新編日本古典文学全集「竹取物語　伊勢物語　大和物語　平中物語」片桐洋一他
小学館　平六

「竹取物語評解」増訂版　三谷栄一
有精堂　昭六十三

「竹取物語全評釈」上坂信男　右文書院　平二、十二

「竹取物語　現代語訳対照・索引付」大井田晴彦
笠間書院　平二十四

新潮日本古典集成新装版「竹取物語」野口元大
新潮社　平二十六

「新版　竹取物語」（角川ソフィア文庫）室伏信助
角川学芸出版　平十三

文法解説「竹取物語・伊勢物語」（付　大和物語）
日栄社　昭四十八

文法鑑賞「竹取物語新解釈」三谷栄一著
有精堂出版　昭五十六

古典　読解と演習「竹取物語・伊勢物語」伊藤秀利
朋友出版株式会社　昭六十

▽研究書

日本文学研究大成「竹取物語・伊勢物語」片桐洋一編
国書刊行会　昭六十三

「平安朝文学と漢文世界」渡辺秀夫
勉誠社　平三

「竹取物語の研究ー達成と変容」奥津春雄　翰林書房　平十二

「平安物語叙述論」藤井貞和
東京大学出版会　平十三

「かぐや姫幻想」新装版小嶋菜温子
森話社　平十四

「源氏物語の文学史」高田祐彦
東京大学出版会　平十五

「物語史の解析学」土方洋一
風間書房　平十六

「竹取物語論ー神話／系譜学」関根賢司
おうふう　平十七

「益田勝実の仕事2」益田勝実
筑摩書房　平十八

「竹取物語本文集成」王朝物語史研究会
勉誠出版　平二十

▽入門書・研究案内

鑑賞日本古典文学「竹取物語・宇津保物語」三谷栄一他
角川書店　昭五十

鑑賞日本の古典「伊勢物語・竹取物語・宇津保物語」藤岡忠美他
尚学図書　昭五十六

研究資料日本古典文学「物語文学」
明治書院　昭五十八

「平安文学研究ハンドブック」田中登他　和泉書院　平十六
「『竹取物語』から「かぐや姫」へ――物語の誕生と継承」
斉藤みか　東京堂出版　令二

❊生徒用

「竹取物語（全）」（角川ソフィア文庫　ビギナーズ・クラシックス）角川書店編　角川学芸出版　平十三
「知ってる古文の知らない魅力」鈴木健一　講談社　平十八
「竹取物語」江國香織　新潮社　平二十
「かぐや姫と王権神話『竹取物語』・天皇・火山神話」
保立道久　洋泉社　平二十二
「日本語の古典」山口仲美　岩波書店　平二十三
「物語のいでき始めのおや『竹取物語』入門」原國人
新典社　平二十四

図版解説　**〈竹取物語絵巻〉**

國學院大學図書館蔵。書写年代江戸時代前期。絵巻。三巻。表紙は、梅花・菊花亀甲織文。絵は、上巻に六面、中巻に七面、下巻に五面。箱書に「竹取物語三巻　詞書青蓮院宮尊鎮親王御筆　絵　狩野永徳法印筆」とある。絵は住吉絵風で元禄頃のものと思われる。本文は古本系統の京大夫、池田亀鑑旧蔵の高安本と同じ。単元トビラには月を見て嘆くかぐや姫を描いた場面、本文の挿絵は翁が籠に入れてかぐや姫を養う場面を採録した。

⇩P45・47

かぐや姫の生ひ立ち

要旨

竹取の翁が、ある日竹の中に小さな女の子を見つけた。少女は翁夫婦に養われてすくすくと育ち、三か月くらいするうちに美しい一人前の女性となって、世の男たちから求婚されるようになった。

構成

段落	ページ・行	段意
第一	初め～P四六・8〈籠に入れて養ふ。〉	竹取の翁が、光る竹の中に小さな女の子を見つけ、家へ連れ帰って育てた。
第二	P四六・9〈竹取の翁〉～P四六・10〈豊かになりゆく。〉	この少女を見つけてから、翁が竹を取ると、黄金（こがね）のつまった竹が見つかるようになり、翁はしだいに裕福になっていった。
第三	P四七・1〈この児〉～P四七・8〈腹立たしきことも慰みけり。〉	少女は成長し、三か月で一人前の女性になったので、翁は、姫君の髪上げ・裳着（もぎ）（成人式）をした。姫君の美しさは光り輝き、翁は苦しいときも腹立たしいときも、慰められた。
第四	P四七・9〈翁、竹を取ること〉～終わり	姫君が成人したので、翁は命名式を行い、なよ竹のかぐや姫と名付けた。多くの客を招いて宴会を催したところ、世の全ての男たちはうわさに聞いて、妻にしたいと心を乱した。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

①今は　昔、竹取の翁と　いふ　者　あり　けり。②野山に
係助・区別　格助・引用　ラ変・用　過・終　格助・場所

まじりて　竹を　取りつつ、よろづの　ことに　使ひ
ラ四・用　接助・単接　格助・対象　ラ四・用　接助・反復　格助・体修　格助・自的　八四・用

けり。③名をば　讃岐の造と　いひ　ける。④
過・終　連語（格助・対象＋係助・強意）　格助・引用　係助・強意（係）　八四・用　過・体（結）

その　竹の　中に、もと　光る　竹なむ　一筋　あり
代　格助・体修　格助・体修　格助・場所　ラ四・体　係助・強意（係）　ラ変・用

ける。⑤あやしがりて　寄りて　見るに、筒の　中
過・体（結）　ラ四・用　接助・単接　ラ四・用　接助・単接　マ上一・体　接助・単接　格助・体修

光りたり。⑥それを　見れば、三寸ばかりなる　人、いと
ラ四・用　存・終　代　格助・対象　マ上一・已　接助・順偶　副助・程度　断・体　副

うつくしうてゐたり。⑦翁、言ふやう、「わが
形シク・用（ウ音）　接助・単接　ワ上一・用　存・終　八四・体　代　格助・主格

夕ごとに　見る　竹の　中に　おはする　にて、知り
格助・時間　マ上一・体　格助・体修　格助・場所　サ変・体（尊）翁→かぐや姫　格助・理由　ラ四・用

ぬ。子に　なり　給ふ　べき　人な　めり。」とて、
完・終　格助・変化　ラ四・用　補動・八四・終（尊）翁→かぐや姫　当・体　断・体（撥音）　定・終　格助・引用

手に　うち入れて、家へ　持ちて　来ぬ。⑧妻
格助・場所　ラ下二・用　接助・単接　格助・方向　タ四・用　接助・単接　カ変・用　完・終

の　嫗に　預けて　養はす。⑨うつくしき　こと
格助・体修　格助・対象　カ下二・用　接助・単接　八四・未　使・終　形シク・体

限りなし。
形ク・終

①今となっては昔のことだが、竹取の翁という者がいた。②野山に分け入って竹を取っては、さまざまなことに使っていた。③名前を讃岐の造といった。④その竹の中に、根元が光る竹が一本あった。⑤不思議に思って近寄って見ると、筒の中が光っている。⑥それを見ると、三寸くらいの人が、実にかわいらしい様子で座っている。⑦翁が、言うことには、「私が朝夕いつも見る竹の中にいらっしゃることで、分かった。子になってくださるはずの人であるようだ。」と言って、手の中にひょいと入れて、家へ持って来た。⑧妻の嫗に任せて育てさせる。⑨かわいらしいことはこの上もない。⑩実に小さいので、籠に入れて育てる。

⑩いと　幼けれ　ば、　籠に　入れ　て　養ふ。
副　形ク・已　接助・順理　格助・場所　ラ下二・用　接助・単接　八四・終

⑪竹取の翁、竹を　取る　に、　この　子を　見つけ　て　のち　に　竹　取る　に、　節を　隔て　て　よごと　に、　黄金ある　竹を　見つくる　こと　重なり　ぬ。
格助・対象　ラ四・体　格助・時間　代　格助・体修　格助・対象　カ下二・用　接助・単接　格助・対象　カ下二・体　接助・単接　格助・対象　タ下二・用　接助・単接　ラ四・用　完・終

⑫かくて、翁、やうやう　豊かに　なりゆく。
接　副　形動ナリ・用　カ四・終

⑬この　児、養ふ　ほど　に、　すくすくと　大きに　なりまさる。
代　格助・体修　八四・体　格助・時間　副　形動ナリ・用　ラ四・終

⑭三月ばかり　に　なる　ほど　に、　よき　ほど　なる　人　に　なり　ぬれ　ば、　髪上げ　など　さうし　て、　髪　上げ　させ、　裳　着す。
副助・程度　格助・変化　ラ四・体　格助・時間　形ク・体　断・体　格助・変化　ラ四・用　完・已　接助・順理　副助・例示　サ変・用　接助・単接　ガ下二・未　使・用　サ下二・終

⑮帳の　うち　より　も　出ださ　ず、　いつき　養ふ。⑯この　児の　かたち、けうらなる　こと　世に　なく、屋の　うち　は　暗き　所　なく　光　満ち　たり。
格助・体修　格助・起点　係助・同類　サ四・未　打・用　カ四・用　八四・終　代　格助・体修　形動ナリ・体　格助・場所　形ク・用　格助・体修　係助・区別　形ク・体　形ク・用　タ四・用　存・終

⑰翁、心地　悪しく　苦しき　こと　も　ときも、この　子を　見れ　ば、　苦しき　こと　も
格助・対象　マ上一・已　接助・順恒　形シク・体　係助・列挙　係助・同類　代　格助・体修　格助・対象　形シク・用　係助・列挙

⑪竹取の翁が、竹を取るときに、この子を見つけて以後に竹を取ると、節と節の間の空洞の一つ一つに、黄金がある竹を見つけることが何度もあった。⑫こうして、翁は、だんだんと裕福になってゆく。

⑬この幼子は、育てるうちに、ぐんぐんと大きく成長してゆく。⑭三か月くらいになる頃に、一人前の大きさの人になったので、髪上げなどのことをさまざまに準備して、髪を結い上げさせ、裳を着せる。⑮帳の中からも出さずに、大切にかしずき育てる。⑯この幼子の顔だちは、清らかで美しいことこの上もなく、家の中は暗い所がなく光が満ちている。⑰翁は、気分が悪く苦しいときでも、この子を見ると必ず、苦しいことも治まってしまう。⑱腹が立つようなことでも心が静まった。

やみ　ぬ。⑱腹立たしき　こと　も　係助・列挙　慰み　けり。
マ四・用　完・終　形シク・体　マ四・用　過・終

⑲翁、竹を　取る　こと　久しく　なり　ぬ。⑳勢ひ　猛の
格助・対象　ラ四・体　形シク・用　ラ四・用　完・終　形動ナリ・語幹　格助・体修

者に　なり　に　けり。㉑この　子　いと　大きに　なり　ぬれ
格助・変化　ラ四・用　完・用　過・終　代　格助・体修　副　形動ナリ・用　ラ四・用　完・已

ば、名を、御室戸斎部の秋田を　呼び　て、付け　さす。
接助・順理　格助・対象　格助・対象　バ四・用　接助・単接　カ下二・未　使・終

㉒秋田、なよ竹のかぐや姫と　付け　つ。㉓この　ほど　三日、
格助・引用　カ下二・用　完・終　代　格助・体修

うちあげ　遊ぶ。㉔よろづ　の　遊び　を　ぞ　し　ける。
ガ下二・用　バ四・終　格助・体修　格助・対象　係助・強意(係)　サ変・用　過・体(結)

㉕男は　うけきらは　ず　呼び集へ　て、いと　かしこく　遊ぶ。㉖世
係助・区別　八四・未　打・用　八下二・用　接助・単接　副　形ク・用　バ四・終

界の　をのこ、あてなる　も　いやしき　も、いかで　この
格助・体修　形動ナリ・体　係助・列挙　形シク・体　係助・列挙　副　代　格助・体修

かぐや姫を　得　てしがな、見　てしがな　と、音に
格助・対象　ア下二・用　終助・自願　マ上一・用　終助・自願　格助・引用　格助・手段

聞き、めで　て　惑ふ。
カ四・用　ダ下二・用　接助・単接　八四・終

⑲翁は、（黄金の入った）竹を取ることが長く続いた。⑳富裕で勢力のある者になっていった。㉑この子はたいそう大きくなったので、名前を、御室戸斎部の秋田を招いて、付けさせる。㉒秋田は、なよ竹のかぐや姫と付けた。㉓このとき三日間、宴会を開き音楽を奏でて楽しむ。㉔さまざまな歌舞音曲を演奏して楽しんだ。㉕男は誰でも構わず招き集めて、たいそう盛大に管弦の宴を催す。㉖この世の男は、身分の高い者も低い者も、何とかしてこのかぐや姫を妻にしたい、会いたいと、うわさを聞き、恋い慕って心が乱れる。

学習活動のポイント

■導入

学習活動のポイント

❶「竹取物語」について知っていることを発表する。知技(2)イ
❷「竹取物語」の全体の構成・展開について理解する。

❶幼い頃に聞いたかぐや姫の話の内容を発表させ、黒板に整理する。

【評価】 古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解しているか、確認する。

❷❶で整理した内容を使い、誕生・求婚・昇天の三部構成になっていることを解説する。

■展開

学習活動のポイント

❶「かぐや姫の生ひ立ち」を音読する。思判表B(1)ア
❷教師の範読を聞きながら、大意を押さえ、解釈が難しい部分を指摘する。知技(1)エ
❸古語の意味・用法、文法事項に注意しながら、現代語訳する。（「古文を読むために5」を参照する）知技(1)ウオ・(2)ウ
→**「言葉と表現」1**
❹当時の風俗・習慣について理解を深める。思判表B(1)エ
❺かぐや姫が普通の人間と異っているところを指摘する。思判表B(1)ア
→**「学習のポイント」1**
❻翁のかぐや姫に対する行動、かぐや姫の様子を現代語訳を参考にまとめる。思判表B(1)イ
→**「学習のポイント」2**

❶指名して、ゆっくり正確に音読させる。学習の最後にも内容を理解したうえで、ふさわしい音読を工夫するように指導し、音読させる。

【評価】「読むこと」において、文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、音読により、確認する。

❷難解な箇所は少ないので、現代語と意味の異なる語（「ゐる」「うつくし」「やうやう」など）を指摘し、古語辞典などで意味を確認させる。

【評価】 文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解しているか、確認する。

❸助動詞の意味や、係り結び、形容動詞の語幹用法、終助詞「てしがな」などに注意して正確に現代語訳させ、全体の内容をつかませる。「古文を読むために5」を参考にし、現代語と意味の異なる語に注意し、助詞や助動詞の意味・用法をつかみながら、文章を正確に理解できたか。部分部分を現代語訳させ、正確さを見極める。文脈をたどりながら古文を読む力については、主としてペーパーテスト（小テスト・定期考査）で確認する。

【評価】我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしているか、ペーパーテストにより、確認する。

・我が国の言語文化に特徴的な表現の技法とその効果について理解しているか、ペーパーテストにより、確認する。

・古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや、古典特有の表現などについて理解しているか、ペーパーテストにより、確認する。

❹「髪上げ」「裳着」などの古典特有の風俗について、結婚を含めた平安時代の貴族の一生について説明する。

【評価】作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めているか、ペーパーテストにより、確認する。

❺読み取ったことを発表させ、箇条書きにしていく。かぐや姫が人間と異なっているところ、翁のかぐや姫に対する気持ちへの理解度は発表を求め、その様子で判断する。

【評価】かぐや姫の様子について、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、確認する。

❻翁の行動とかぐや姫の様子を二段組にして表化する。奇異なできごとながら、かぐや姫の面倒をみることで、裕福になったり、心が和んだりしていることを指名により確認する。定期考査などにまとめの問題として織り込んでもよい。

【評価】かぐや姫と翁の様子について、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈しているか、確認する。

■まとめと発展

学習活動のポイント

❶本文中から過去や完了の意味を持つ助動詞を探し、本文のどの位置に表れるか、確認させる。知技(1)ア・(2)エ 主態
→**「言語活動」1**

❷「五人の貴公子の求婚」について概略を聞き、物語の全体像をつかむ。

❶「けり」「たり」「ぬ」「つ」の四つの助動詞ごとに、どのような文脈の中に現れるかを確認させ、助動詞の使い分けについて理解を深めさせる。

【評価】言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解しているか、確認する。

・時間の経過や地域の文化的特徴などによる文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解しているか、確認する。
・進んで文語助詞の種類と用法を理解し、学習課題に沿って、本文中から過去や完了の意味を持つ助動詞を探し、本文のどの位置に現れるかを確認して、物語の構造を捉えようとしているか、分析する。

❷次の「かぐや姫の嘆き」を読解するうえでも参考になるので、生徒の興味を引くように、概略を説明する。

指導上の注意点と発問例

●四六ページ

問 **「今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。」（2行目）について、**
[1] 現代語訳せよ。
[2] 「今」とは「竹取物語」成立時頃のことを意味すると考えられるが、何時代のことか答えよ。

答 [1]今となっては昔のことだが竹取の翁という者がいた。[2]平安時代（前期）

問 **「竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。」（2行目）について、**
[1] 「つつ」を文法的に説明せよ。
[2] 「よろづのことに使ひけり。」とあるが、例えばどのようなものに「竹」を使ったと考えられるか。

答 [1]動作の反復を表す接続助詞　[2]ざる、籠など

問 **「造となむいひける。」（3行目）、「竹なむ一筋ありける。」（4行目）について、**
[1] 文末が「けり」ではなく「ける」になっている理由を文法的に説明せよ。
[2] 前問[1]のように、結び（文末）を連体形に変える働きを持つ語（係助詞）を「なむ」以外に三つあげよ。

答 [1]係助詞「なむ」が上にあるので、係り結

語句の研究

●四六ページ

2 竹取の翁といふ者　「『竹取の翁』と（世人が）いう者」の意。「竹取の翁」は、竹の採取加工を生業とする老人。「といふ者」と珍しい存在を紹介する語り方である。

2 まじりて　分け入って。「野山にまじり」の例として、「源氏物語」椎本巻に「今はまして、野山にまじりはべらむも、いかなる木の本をかは頼むべくはべらむ」とある。

2 竹を取りつつ　ここでいう竹は、真竹・淡竹など。

2 よろづのこと　籠、笊、箒、簀の子などさまざまな竹器の製作をいうのであろう。

3 をば　対象の格助詞「を」に、強調の係助詞「は」が付いて連濁した連語。単に「を」と言うよりも強調した表現。

3 讃岐の造　「讃岐」が氏、「造」は後の箇所に「造麻呂」ともある翁の名。「讃岐」は大和の国広瀬郡散吉郷（奈良県北葛城郡河合町）の「散吉」によるか。「造」は古代の姓の一つだが、ここは個人名を指す。「讃岐」は底本の「新日本古典文学大系」は「さかき」とするが、意を以て改めた。古本系諸本・古活字本は「さるき」、群書類従本は「さぬき」。「か／る／ぬ」の変体仮名の類似により、異同が生じたものと見られる。

4 あやしがりて　「がる」は、名詞や形容詞・形容動詞の語幹などに付いて「…のように感じる、…のようにする」の意の動詞を作る接尾語。

4 筒の中光りたり　文末が「けり」から「たり」に変化。以下、終止形、「たり」、「ぬ」文末が多く、「けり」は少ない。物語世界の現在が叙述の基調となる。

5 三寸ばかり　「三」は、この物語の数の基本となっている。「三月」（四七・2）「三日」（四七・12）などとある。

5 うつくしうて　平安時代の「うつくし」は、①（幼い者・小さい物などが）かわいらしい、愛らしい。②（見た目に）美しい。③立派だ（②③を認めない説もある）。ここは最も基本的な①の意。

5 言ふやう　「言うことには」。「やう」は形式名詞的に用いて、発言や思考の内容の引用文を導く。「言ふやう、『…』とて」は漢文訓読的表現。

5 朝ごと夕ごと　対句的な表現。「ごと」は

びの法則により、結びが連体形になっている。[2]ぞ・か・や

問　**「その竹の中に」（３行目）の「その」とは何を指しているか。**

答　翁が毎日取っていること。

補答　だからこそ翁は、かぐや姫を自分の子になる人だ、と思ったのである。

問　**「あやしがりて」（４行目）について、「あやしがる」は形容詞「あやし」から派生した動詞であるが、その意味は、大別して「怪し」と「賤し」という二つの表記によって示すことができる。ここでの意味はどちらに当てはまるか。**

答　怪し

問答　**「いとうつくしうてゐたり。」（５行目）より、現代語と形は同じでも意味の異なる語を二つあげ、それぞれ、今と昔とでどのように意味が異なっているか説明せよ。**

答　・うつくしう…（今）きれいで（昔）かわいらしく　・ゐ…（今）存在して（昔）すわって

問　**「うつくしう」という表現は「うつくしく」から変化したものであるが、このような音の変化を何と言うか。**

答　（ウ）音便

問答　**第一段落では、かぐや姫はどのように形容されているか。また、成長後の形容はどの**

「…のたびに、…の全てに」の意の接尾語。

6おはする　竹の中にいた人を、翁は神聖な存在だと思って敬語を使う。下の「子になり給ふべき人」の「給ふ」も同じ。天から自分に授けられた人、という意識が敬語で表現されたとも考えられる。

6知りぬ　「知る」の内容は「子になり給ふべき人」であり、倒置した表現である。

6子になり給ふべき人　「籠（こ）―子」を掛詞的に重ねた洒落。後文に「籠（こ）に入れて」（四六・８）とあるように、竹かごを「籠（こ）」と言った。（竹の中にいたのだから）竹が籠（こ）になるように、わが子になってくださる人。

6なめり　断定の助動詞「なり」の連体形に推定の助動詞「めり」が付いた「なるめり」が撥音便化した「なんめり」の「ん」を表記しない形。普通「ん」を補って「なんめり」と読む。「めり」は竹の中にいるという視覚的状況に基づく推定。

7手にうち入れて　「うち」は、動作に「ひょいと、ちょっと、さっと、すっかり」などの感じを添える接頭語。竹の中にいた人が、小さくて軽いことが分かる。

7妻の嫗　「嫗」は「翁」の対。

7預けて養はす　「任せて養育させる」。「預く」は「世話・管理を人に任せる」の意。ここでは食事や衣服の世話を指すのであろう。「養はす」は助動詞「す」が未然形に接続することが分かりやすい例。

8幼ければ　「幼し」の「幼少だ、未熟だ」の意から、かぐや姫の背丈をいうとする通説に従うが、一説に、「（翁たちの）思慮が足りないので」の解もある（上坂信男「竹取物語全評釈」）。

8籠に入れて　「籠」は「和名類聚抄（わみょうるいじゅうしょう）」器皿（きべい）部・竹器類に「籠（略）〈和名古（略）〉竹器也」とある。

9竹取の翁、竹を取るに、この子を見つけてのちに竹取るに　「たけ―と」の音が繰り返されてリズミカル。口承の語りを模した表現。

9節を隔ててよごとに　「よ」は竹の節と節との間の空洞部分。先出の「筒」（四六・４）は外側から捉えた表現。竹に関する記述が詳細である。「和名類聚抄」草木部・竹具に「〈両節之間俗云与〉」とある。

10黄金　金塊と考えてもよいが、砂金が妥当であろう。大判小判ではない。

10豊かになりゆく　「ゆく」は動作が次第に進行、または継続する意を添える補助動詞。

ように変化しているか。

答　最初は「うつくし」（かわいらしい）と表現されているが、成長後は「けうらなり」（清らかで美しい）と表現されている。

補　「けうらなり」は最高の美しさをいい、輝くような美しさを表す。小さいときから、大人になるにしたがって、かぐや姫の神々しい美しさが際だってくる様子が分かる。

問　「ゐたり」（５行目）とあるが、現代語の「いる」と古語の「ゐる」の意味の違いを答えよ。

答　現代語「いる」は人や動物の存在を表すが、古語「ゐる」は「座る」の意が原義。

補　生徒は違いを意識していないことが多いので、注意したい。

問　「手にうち入れて」（７行目）という翁の行動からどのような様子が分かるか。

答　手の平でそっと包み込むようにする様子。かぐや姫が抱けないほど小さい感じ。翁がかぐや姫を手の中にそっと包み込むようにして、大切に持って帰る様が想像できる。

問　出生が不可思議なものに対して、畏敬の念を示すという当時の考え方がうかがわれる語（敬語）を四六ページより二つ抜き出せ。

答　おはする　給ふ

問　「わが朝ごと夕ごとに…人なめり。」（５行目）について、

●四七ページ

1すくすくと大きになりまさる　成長の速いさまを言う。竹の生長の速やかさが連想され、かぐや姫に竹の精としての印象が加わる。「すくすく」はまっすぐの意の「直ぐ」を重ねた表現。「うつほ物語」俊蔭巻に「この子はすくすくと引きのぶる物のやうに大きになりぬ。」の例がある。

2よきほどなる人　一人前の大きさの人。「大和物語」一七三段に「たけだちいとよきほどなる人」と、背丈の高さをいう例がある。

3髪上げ　垂らしていた髪を結い上げること。女子の成人儀礼。通常十二～十四歳頃に行う。ふだん長い髪を垂らしている平安時代の貴族女性も、儀式の際には髪を「上げ」たと思われるが、具体的な髪型は不明。必要に応じてインターネット等で「大垂髪（おすべらかし）」の語を検索したり、小町谷照彦・倉田実編「王朝文学文化歴史大事典」（笠間書院、平二十三）の「通過儀礼」の項などを参照したりするよう指導してもよい。

3さうして　諸説あるが、「さうす」を「さまざまに準備する、手配する」の意と解する通説に従う。日常の世話を嫗に任せた翁も、儀礼的行事の準備には奔走する。

4裳着す　「裳」は、腰の後ろを覆う装飾的な衣。女性の正装に用いた。初めて裳を着用することが髪上げとともに女子の成人儀礼となっていて、「裳着（もぎ）」という。裳着は、結婚を念頭に行われることが多かった。髪上げ・裳着の実施は、翁がかぐや姫を貴族の姫君のように扱うことを示す。また、そうする財力をすでに蓄えていたと読める。

4帳　遮蔽具の布。具体的には几帳など。一説に帳台（ちょうだい）（浜床（はまゆか）という台座の上に畳を敷き、四方に帳を垂らした貴人の座所）。

4いつき養ふ　「いつ（斎）く」は「神などの霊威を畏れ敬い、身を潔斎して祀り仕える」が原義。ここは神を敬うように大切にかしずくこと。翁は姫を見つけたときにも、神聖な子と信じ、「おはす」「給ふ」と敬語を使っていたが、美しく成長した姫をますます大切にするのである。

5かたち　平安時代には、人について用いられる場合、顔だち・容貌を指すことが多い。「まみ、口つき、いと愛敬づき、はなやかなるかたちなり」（「源氏物語」空蟬巻）などの例がある。

5けうらなる　「けうらなり」（「キョーラナ

問 1 **「知りぬ」とは、何によって、何を知ったのか、簡潔に説明せよ。**

2 **この部分には、一種の言葉遊びとも言える洒落が含まれている。どういう点か、具体的に説明せよ。**

答 1 自分の仕事と縁のある竹の中から見つけたということによって、三寸ばかりの美しい人が「子になり給ふべき人」であることを知った。2「子」を「籠」との掛詞として使っている点。

問 **かぐや姫の小さい姿を印象づける表現を、第一段落より二箇所抜き出せ（「三寸ばかりなる人」を除く）。**

答 ・手にうち入れて、家へ持ちて来ぬ。
・いと幼ければ、籠に入れて養ふ。

問 **「よごとに、黄金ある竹を見つくること重なりぬ。」（9行目）とあるが、この結果、翁の境遇はどうなったか、本文中より適切な語句（五字）を抜き出せ。**

答 勢ひ猛の者

● 四七ページ

問 **「すくすくと大きになりまさる。」（1行目）とは、どのような様子を表現しているか。**

答 竹の生長の速さをイメージとして重ねていて、ぐんぐん大きくなっていく様子。

補 たとえば、真竹は一日に一メートルも伸びることもあり、その生長の仕組みはいまだに科学的に解明されていない部分があるという。このようにまっすぐに生長し、緑が続く竹は、神の依代（よりしろ）となる神聖なものとして、古来より神事などに用いられてきた。かぐや姫はその竹の申し子のように表現されている。

問 **「よきほどなる人」（2行目）とは、どのような人か。**

答 成人した一人前の女性。結婚できるぐらいの年齢の女性。髪上げや裳着の儀式をするにふさわしい年頃・背丈の人。

問 **当時の女子の成人儀式を二つ、四七ページよりあげよ。**

答 髪上げ　裳着す

問 A **「帳のうちよりも出ださず、いつき養ふ。」（4行目）とは、どのような育て方なのか、説明せよ。**

B **翁と嫗が、かぐや姫を異常なほどに保護して大切に養育したことを示す一文を、本文中より抜き出せ。**

答 A 高貴な家の姫君のように、身内以外の目に触れないように育てる（外の風に全然触れさせないほどに保護して、大切に養育する）。B 帳のうちよりも出ださず、いつき養ふ。

問 **「屋のうちは暗き所なく光満ちたり。」（四七・5）という表現の効果として適切なもの**

リ」と読む）は「きよらなり」の転とする説に従う。「清らかで美しい」の意。最高の美しさを形容する。

6 心地悪しく　「気分が悪く」。次に「腹立たしきこと」とあるので、ここは身体的な病をいうのであろう。

8 腹立たしきことも慰みけり　自動詞の「慰む」（マ行四段）は「心が晴れる、心が静まる、なごむ」の意。

9 猛　「猛なり」は盛んなさま、壮麗なさまなどを表す語。荒々しいの意はない。

11 御室戸斎部の秋田　「御室戸」は地名。山城の国宇治郡の地名とも、大和の国磯城郡の三輪山を指すともいう。「斎部」（「忌部」とも）は朝廷の神事を掌った氏族の名。一方、竹は、生長の速さが霊威を感じさせ、稈（かん）が中空であることから、神霊の依代に適した植物と考えられ、神事に用いられた。竹取の翁は、神事を介して斎部氏と関わる人物として設定されたのかもしれない。名の「秋田」は五穀の稔りを連想させる。

12 なよ竹のかぐや姫　しなやかで光り輝く女性の意を込めた名。姫の出生の経緯を踏まえよい意味の言葉を選んだ。「なよ竹」は「細くしなやかな竹」。「かぐ」は火の神、

のを次の中から二つ選べ。

(ア)かぐや姫の輝くばかりに美しい容貌を賛美している。

(イ)老夫婦が裕福な生活を望んでいることを暗示している。

(ウ)訪問客の多い華やかな生活ぶりを強調している。

(エ)かぐや姫が光り輝く別世界の人であることを暗示している。

答 (ア)・(エ)

問 ◉ 竹取の翁が「勢ひ猛の者」（9行目）になったのは、なぜか。

答 かぐや姫を見つけてから竹を取ると、節と節の間に黄金がつまった竹が見つかるようになったから。

問 竹取の翁が「勢ひ猛の者」になったことを裏付ける具体的な事柄を三つあげよ。

答 ①成人式を盛大に行った。②名付け親をわざわざ決めて命名式をした。③三日間も盛大な祝宴を催し、男たちを多数招待した。

問 次の傍線部の助動詞の意味を答えよ。

1 「付けさす。」（11行目）

2 「付けつ。」（12行目）

答 1 使役　2 完了

問 「いとかしこく遊ぶ。」（14行目）について、「かしこし」のここでの意味を答えよ。

答 盛大に

問 「世界のをのこ、…めでて惑ふ。」（14行目）について、

1 [易]対句表現になっている部分を抜き出せ。

2 [易]「あてなるもいやしきも」に適切な漢字を当て、現代語訳せよ。

3 [中]「音」を現代語（五字以内）に訳せ。

4 [易]「惑ふ」のここでの意味として適切なものを次の中から選べ。

(ア)困惑する　(イ)心を乱す　(ウ)うろたえる

答 1 ・あてなるもいやしきも　・得てしがな、見てしがな　2 貴なるも卑（賤）しきも　現代語訳＝身分の高い者も低い者も　3 うわさ　4 (イ)

問 かぐや姫が普通の人間ではなく、神秘的な存在であることを次の観点から、それぞれ二〇字以内で説明しなさい。

(1)出生時の様子　(2)養育者の生活変化　(3)成長過程　(4)日常の生活

答 (1)三寸くらいの非常に小さい人であった。(2)黄金入りの竹を見つけ、裕福になった。(3)三か月ほどで一人前の大きさに成長した。(4)家の中は光り輝き、翁の心を和らげた。

問 竹取物語のように神秘的な要素を含む物語のことを、一般的に何と言うか、次の中から正しいものを選びなさい。

(ア)歴史物語　(イ)歌物語　(ウ)伝奇物語　(エ)怪奇談

迦具土（かぐつち）の「かぐ」に同じ。「かぎろひ」（曙光）「かがよふ」（揺れながら光る）の「かぎ」「かが」と同根で、「キラキラと光る」の意（「輝く」は近世初期までカカヤクと清音なので、語源は別とされる）。「や」は「木（こ）の花の咲くや姫」の「や」と同じく詠嘆であろう。「古事記」中巻には垂仁天皇の妃に迦具夜比売命（かぐやひめのみこと）の名が見える。

12 うちあげ遊ぶ　「うちあぐ」は、手を打って歌い騒ぐことから転じて「宴会を催す」の意。「遊ぶ」は、祭りや宴、あるいは狩りや野遊びなどの非日常的な時間の中で、神霊と交感し、魂を賦活することが原義であり、特に歌舞管弦などを奏することに用いられた。

13 うけきらはず　「誰でも構わず」。受け入れることを嫌がらないことをいう。

14 かしこく　形容詞「かしこし」は連用形が副詞的に用いられると「たいそう、ひどく、盛大に」などの意になる。

14 世界　「この世、世の中、地方、あたり、別世界」などの意。元来は仏教語。

14 あてなるもいやしきも　対句的表現。形容動詞「あてなり」は①高貴だ、身分が高い。②上品だ、優雅だの意。ここでは①。「あ

問 答 (ウ) **竹取の翁のかぐや姫に対する愛情がうかがわれる箇所を現代語で三点にまとめて答えなさい。**

答 ①大切に家に持ち帰って、心をこめて育てた。②成人式をして、家の中から出さずに大切に育てた。③名を付けさせて、それを祝う宴を開いた。

てなる」「いやしき」はともに「者」を補って解する。

15いかで　願望の終助詞「てしがな」と呼応して「何とかして」。副詞の呼応については「古文を読むために5」を参照されたい。

15得てしがな、見てしがな　対句的並列表現。親兄弟でもない男性が、深窓の姫に会うことは、実質的に結婚を指すので、「得て…見て…」は同内容の反復である。「てしがな」は、本来、完了の助動詞「つ」の連用形＋自己の願望の終助詞「しが」（上代では清音「しか」）＋詠嘆の終助詞「な」であるが、一語化して終助詞となったと考えられることが多い。

15音に聞き　姫に会えない男たちは、うわさを聞いて、心をときめかせる。

15めでて惑ふ　「恋い慕って心が乱れる。」「めづ」は、対象に心ひかれて感嘆したり、愛したりすることを表す語。派生語に「めでたし」「めづらし」がある。

鑑賞

「竹取物語」は、「今は昔、…ありけり。」と、説話や物語の冒頭の常套表現で始まり、世の中にかつてあった（という建前の）珍しい出来事を語る物語の世界へと読者を誘う。

かぐや姫が竹取の翁に発見され、その養女となって成長する過程は、天人女房譚や小さ子譚、致富長者譚といった複数の物語の型を組み合わせて成り立っている。各々が一編の昔話になる不思議な話をいくつも集めて凝縮し、虚構としての「竹取物語」の世界が切り拓かれている。

そもそも「竹取の翁」も、「万葉集」巻十六には、丘の上で九人の仙女に会って和歌を詠みかわす人物として現れているのであり、不思議な出来事に遭遇する人間側の主人公として意図的に選ばれた可能性がある。また、物語に明確に描かれてはいないが、翁・嫗には子供がなく、姫を神からの授かり物と受けとめたように読める。物語全篇にあふれる翁の姫への愛情の源泉を、この点に求めてもよいだろう。

物語冒頭部において、不思議な出来事を感覚的に作り出している要素が「光」である。光る竹があって、その中に九センチメートルほどのかぐや姫がいた。神秘の存在は光とともに出現する。出現の際、光に包まれていたかぐや姫は、成長すると「屋のうちは暗き所なく光満ちたり」と光り輝く。現代でも、すばらしい人を評して輝いているという。言葉の虚構によって、比喩的な想像を現実として語るのである。光の形容は、「うつほ物語」の俊蔭の娘や仲忠、「源氏物語」の光源氏に受け継がれる。仏教の仏・菩薩も光を放つ。電気による照明器具が発達した現代からは想像しがたい価値が、光にあったのだろう。光るかぐや姫は、翁の心身を癒した。医療技術に乏しい時代、病を治癒する力にも特別な価値があったはずだ。

物語のかぐや姫を貴族社会へと結びつけるのが、姫の成人儀礼である。髪上げや裳着、命名式を経て祝宴を開くことにより、かぐや姫の存在は世間に知られ、求婚譚へ展開する。姫に貴族女性の成人儀礼を行うことは、翁の愛情ゆえであり、またそれを可能にする財力を竹の中の黄金がもたらした。物語は巧みに構成されていると言えよう。また、平安時代中期には貴族女性の髪型は垂髪を基本としているにもかかわらず、「髪上げ」が儀礼として残っていることを、現代の成人式の装いと比べてみるのも興味深いであろう。

物語の文体にも目を向けよう。「竹取の翁、竹を取るに、この子を見つけてのちに竹取るに」と、口承の語り口を思わせる反復が見られる一方、「翁、言ふやう、『…』とて」という漢文訓読的表現があり、両者の複合が作者の文体を作ったと見られる。また、漢詩文の影響とは言い切れないが、「朝ごと夕ごと」、「あてなるもいやしきも」、「得てしがな、見てしがな」といった対句的な表現も注意される。

《板書例》　神秘的なかぐや姫

- もと光る竹なむ一筋ありける　――かぐや姫の発見
- 三寸ばかりなる人
- 手にうち入れて　　かぐや姫の異常な小ささ
- 籠に入れて養ふ
- 黄金ある竹を見つくること重なりぬ
- 三月ばかりになるほどに、よきほどなる人になりぬれば　　かぐや姫の不思議な力
- 屋のうちは暗き所なく光満ちたり
- 苦しきこともやみぬ
- 腹立たしきことも慰みけり

《板書例》「かぐや姫の生ひ立ち」のまとめ

翁の行動	かぐや姫の様子
・根元の光る竹を見つける ・手の中に入れて家へ連れ帰る ・籠に入れて大切に育てる ・成人式を行う	・竹の中に座っている ・とても小さい ・三か月で一人前の大きさになる ・輝くばかりに美しくなる

深い学びのために

学習のポイントの解答例

1 **かぐや姫がほかの人と違うことが分かる部分を、本文中から指摘してみよう。**

【答】①（光る竹の筒の中に）三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。（四六・5）　②この子を見つけてのちに竹取るに、節を隔ててよごとに、黄金ある竹を見つくること重なりぬ。（同・11）　③三月ばかりになるほどに、よきほどなる人になりぬれば（四七・2）　④この児のかたち、けうらなること世になく、屋のうちは暗き所なく光満ちたり。（同・5）　⑤翁、心地悪しく苦しきときも、この子を見れば、苦しきこともやみぬ。腹立たしきことも慰みけり。（同・6）

2 **かぐや姫に対する翁の心情はどのようなものか、本文中の表現をもとに考えてみよう。**

【答】「帳のうちよりも出ださず、いつき養ふ。」（四七・4）とあるところより翁が身内の者以外の目に触れないよう高貴な家の姫君のように育てていることが分かる。そこに翁がかぐや姫を大切に思い、できる限りのことをしようとする心情が表れている。

▼ポイント▲　幼い頃からのかぐや姫の神聖さを目の当たりにし、年を重ねてそれがますます増していくにつれ、翁もいよいよかぐや姫を大切に扱うようになっている。

言葉と表現の解答例

1 **次の傍線部の助詞の種類と用法を、それぞれ確認してみよう。**

(1) **それを見れば**、**三寸ばかりなる人**（四六・4～5）

(2) **いかでこのかぐや姫を得てしがな**（四七・15）

【答】(1) 接続助詞　順接の確定条件の偶然条件を表す。

(2) 終助詞　自己の願望

▼ポイント▲　(1)活用語の已然形に接続し、順接の確定条件を表す。順接の確定条件には次の３つの意、①原因・理由、②偶然条件、③恒常条件がある。(2)活用語の連用形に接続し、自己の願望を表す。「てしが」「てしがな」「にしが」「にしがな」の類語がある。

言語活動の解答例

1 **本文中から過去や完了の意味を持つ助動詞を探し、本文のどの位置に現れるか、確認してみよう。**

【答】

過去の助動詞「けり」

・ありけり。（四六・2）　・使ひけり。（同・3）　・いひける。（同・3）　・ありける。（同・4）　・慰みけり（四七・8）　・なりにけり（同・10）　・しける（四七・13）

存続の助動詞「たり」

・光りたり（四六・4）　・ゐたり（四六・5）　・光満ちたり（四七・6）

完了の助動詞「ぬ」

・知りぬ（四六・6）　・来ぬ（同・7）　・重なりぬ（同・10）　・なりぬれば（四七・3）　・やみぬ（同・7）　・なりぬ（同・9）　・なりにけり（同・10）　・なりぬれば（同・10）

完了の助動詞「つ」

・付けつ（四七・12）

▼ポイント▲　昔話を話すという語りの様相が強い時（書き出しの部分）は伝聞過去の「けり」が多用され、聞き手が話に引き込まれていくようなタイミングで存続の「たり」や完了の「ぬ」が多用されている。「養はす」（四六・7）「養ふ」（四六・8）「なりゆく」（四六・10）等現在形も多く使われている。

「ぬ」は自然的「つ」は人為的なものに使われる傾向にあり、「なよ竹のかぐや姫と付けつ」で「つ」が使われているのは、まさに典型的な例である。

（植田　敦子）

かぐや姫の嘆き

要旨

八月十五夜が近づくと、かぐや姫は泣いて、自分は月の都の人で、因縁があって人間界に来たが、この十五日には、月の都に帰らなければならないことを告白する。翁が、かぐや姫と別れるのなら死んでしまいたいと泣き騒ぐと、かぐや姫も、こんなにも親しんだ翁たちと別れて帰るのは悲しいばかりだと言って嘆く。翁の家の召使たちも悲しんだ。

構成

段落	ページ・行	段意
第一	初め〜P四九・10〈堪へがたげなり。〉	八月十五夜近くになると、かぐや姫は人目もはばからずに泣くようになった。翁がわけを聞くと、自分は月の都の人で、この十五夜には月に帰らなければならないと告白する。翁は驚き、嘆き悲しんだ。
第二	P四九・11〈かぐや姫のいはく〉〜P四九・15〈いみじう泣く。〉	かぐや姫は、短期間のつもりが、人間界に長く暮らして翁・嫗に慣れ親しみ、月にいる実の父母のことは思い出さず、心ならずも月に帰るが、翁たちとの別れが悲しいと訴えて泣いた。
第三	P五〇・1〈使はるる人々も〉〜終わり	翁の召使たちも、かぐや姫の人柄のすばらしさを慕って、物も喉を通らないほどに悲しんだ。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

①八月十五日　ばかり　の　月　に　出でゐ　て、　かぐや姫、　いと
副助・程度　格助・体修　格助・方向　ワ上一・用　接助・単接　副

いたく　泣き　給ふ。　②人目　も　今　は　つつみ　を
形ク・用　カ四・用　補動・八四・終（尊）語り手→かぐや姫　係助・同類　係助・区別　マ四・用　格助・対象

給は　ず　泣き　給ふ。　③これ　を　見　て、　親ども　も、　「何事　ぞ。」　と　問ひ騒ぐ。　④かぐや姫、
補動・八四・未（尊）語り手→かぐや姫　打・用　カ四・用　補動・八四・終（尊）語り手→かぐや姫　代　格助・対象　マ上一・用　接助・単接　係助・同類　係助・強意　格助・引用　ガ四・終

泣く泣く　言ふ、　「さきざき　も　申さ　む　と　思ひ
副　ハ四・体　係助・同類　サ四・未（謙）かぐや姫→翁・嫗　意・終　格助・引用　ハ四・用

しか　ども、　必ず　心　惑はし　給は　む　もの　ぞ
過・已　接助・逆確　副　名　サ四・用　補動・八四・未（尊）かぐや姫→翁・嫗　推・体　係助・強意

と　思ひ　て、　今　まで　過ごし　侍り　つる　なり。
格助・引用　八四・用　接助・理由　副助・範囲　サ四・用　補動・ラ変・用（丁）かぐや姫→翁・嫗　完・体　断・終

さ　のみ　やは　とて、　うち出で　侍り　ぬる　ぞ。
副　副助・限定　係助・反語　格助・引用　ダ下二・用　補動・ラ変・用（丁）かぐや姫→翁・嫗　完・体　係助・強意

おの　が　身　は、　この　国　の　人　に　も　あら
代　格助・体修　係助・提示　代　格助・体修　断・用　係助・同類　補動・ラ変・未

ず。　月　の　都　の　人　なり。　それを、　昔　の　契り　あり
打・終　格助・体修　格助・体修　断・終　接　格助・体修　ラ変・用

ける　に　より　なむ、　こ　の　世界　に　は
過・体　格助・理由　ラ四・用　係助・強意（係）　代　格助・体修　格助・場所　係助・強意

①八月十五日頃の月に向かって出て座って、かぐや姫は、たいそうひどくお泣きになる。②人目も今はお気になさらずに泣いていらっしゃる。③これを見て、親たちも、「どうしたのだ。」と興奮して問いただす。④かぐや姫が、泣きながら言うには、「以前にも申し上げようと思ったけれども、きっと心をお乱しになるにちがいないと思って、今までそのままにしていたのです。（しかし）ずっとそれでいられましょうか（いや、いられません）と思って、うち明けてしまうのです。私の身は、この国の人ではありません。月の都の人なのです。それが、前世からの因縁があったことによって、この世界には参上していました。今は帰らなければならないときになってしまったので、今月の十五日に、あの以前の国から、（私を）迎えに人々が参上しようとしています。避けようもなく、どうしてもおいとましなければならないので、（そのときに、翁と嫗とが）お嘆きになるかもしれないのが悲しいこと（だ

まうで来（き）　たり　ける。　今（いま）　は　帰（かへ）る　べき　に　なり　に
カ変・用（謙）かぐや姫→人間界　完・用　過・体（結）　係助・区別　ラ四・終　当・体　格助・時間　ラ四・用　完・用

けれ　ば、　この　月（つき）の　十五日（もちひ）　に、　かの　もと
過・已　接助・理由　代　格助・体修　格助・体修　格助・時間　代　格助・体修

の　国（くに）　より、　迎（むか）へ　に　人々（ひとびと）　まうで来（こ）　むず。　さら　ず、
格助・体修　格助・起点　格助・目的　カ変・未（謙）人々→人間界　推・終　ラ四・未　打・用

まかり　ぬ　べけれ　ば、　おぼし嘆（なげ）か　む　が
ラ四・用（謙）かぐや姫→翁・嫗　強・終　当・已　接助・順理　カ四・未（尊）かぐや姫→翁・嫗　推・体　格助・主格

悲（かな）しき　こと　を、　この　春（はる）　より、　思（おも）ひ嘆（なげ）き　侍（はべ）る
形シク・体　格助・対象　代　格助・体修　格助・起点　カ四・用　補動・ラ変・体（丁）かぐや姫→翁・嫗

なり。」　と　言（い）ひ　て、　いみじく　泣（な）く　を、　翁（おきな）、「こ　は、
断・終　格助・引用　八四・用　接助・単接　形シク・用　カ四・体　接助・順理　代　係助・提示

なでふ　こと　のたまふ　ぞ。　竹（たけ）の　中（なか）　より　見（み）つけ
連　八四・体（尊）翁→かぐや姫　係助・強意　格助・体修　格助・起点　カ下二・用

聞（き）こえ　たり　しか　ど、　菜種（なたね）　の　大（おほ）きさ
補動・ヤ下二・用（謙）翁→かぐや姫　完・用　過・已　接助・逆確　格助・体修

おはせ　し　を、　わ　が　丈（たけ）　立（た）ち並（なら）ぶ　まで　養（やしな）ひ
サ変・未（尊）翁→かぐや姫　過・体　格助・対象　代　格助・体修　バ四・体　副助・範囲　バ四・用

奉（たてまつ）り　たる　わ　が　子（こ）　を、　何人（なにびと）　か　迎（むか）へ
補動・ラ四・用（謙）翁→かぐや姫　完・体　代　格助・体修　格助・対象　係助・反語（係）　ハ下二・用

聞（き）こえ　む。　まさに　許（ゆる）さ　む　や。」　と　言（い）ひ　て、
補動・ヤ下二・未（謙）翁→かぐや姫　推・体（結）　副　サ四・未　意・終　係助・反語　格助・引用　八四・用　接助・単接

「我（われ）　こそ　死（し）な　め。」　と　て、　泣（な）きののしる　こと、　いと
代　係助・強意（係）　ナ変・未　意・已（結）　格助・引用　ラ四・体　副

と思って、そのこと）を、今年の春から、嘆いているのです。」と言って、ひどく泣くので、翁は、「これは、何ということをおっしゃるのか。竹の中から見つけて差し上げたけれども、からし菜の種の大きさでおありだったのを、私の背丈と同じくらいになるまでに育てて差し上げたわが子を、何者がお迎えしようか（いや、何者もお迎えすまい）。どうして許そうか（いや、許すまい）。」と言って、「私こそ死のう。」と言って、泣き騒ぐ様子は、まったくいかにもこらえきれないようである。

堪へがたげなり。
形動ナリ・終

⑤かぐや姫の　いはく、「月の　都の　人にて、父母あり。片時の　間とて、かの　国より　まうで来しかども、かく、この　国には　あまたの　年を　経ぬるに　なむ　ありける。かの　国の　父母の　ことも　おぼえず、ここに　は　かく　久しく　遊び　聞こえ　て、　慣らひ　奉れ　り。いみじから　む　心地も　せ　ず、悲しく　のみ　ある。されど、おのが　心　ならず、まかり　な　む　と　する。」と　言ひ　て、もろともに　いみじう　泣く。

⑥使はるる　人々も、年ごろ　慣らひ　て、立ち別れ　な　む　こと　を、心ばへ　など　あてやかに　うつくしかり　つる　こと　を

⑤かぐや姫が言うことには、「（私には）月の都の人で、父母がいます。僅かの期間といって、あちらの国から参上しましたが、このように、この国では多くの年を過ごしてしまったのでした。あちらの国の父母のことも思い出さず、こちらには、こうして長い間楽しく過ごさせていただいて、慣れ親しみ申し上げました。（帰るとなっても）うれしく思われる気持ちもなくて、悲しいだけです。そうではありますが、自分の本心とは違って、おいとましてしまおうとしています。」と言って、（翁たちと）一緒にひどく泣く。

⑥（翁に）召し使われている人々も、長年（かぐや姫に）慣れ親しんでいるので、別れ別れになってしまうことになるのを（思って）、性格などが上品

見慣らひ　て、　恋しから　む　こと　の　堪へがたく、　湯水　飲まれ
（みな）　（こひ）　（た）　（ゆみづ）　（の）
八四・用　接助・理由　形シク・未　推・体　格助・主格　形ク・用　マ四・未　可・未

ず、　同じ　心　に　嘆かしがり　けり。
（おな）　（こころ）　（なげ）
打・用　形シク・終　格助・状態　ラ四・用　過・終

でかわいらしかったことをいつも見てなじんでいるので、（別れて後に）恋しく思われるだろうことがこらえきれなくて、湯や水も飲めずに、（姫や翁たちと）同じ思いで悲しんだ。

学習活動のポイント

■導入

学習活動のポイント

❶「かぐや姫の生ひ立ち」の後、五人の貴公子と帝の求婚を退け、最後に昇天に至る場面であることを知る。知技(2)イ

❶「かぐや姫の生ひ立ち」の後の、五人の貴公子の求婚と難題について説明する。貴公子たちを退けた後、帝にも求婚されるが、やはり拒絶したことを説明する。「かぐや姫の嘆き」がそれに続く場面であり、求婚拒否の理由が明かされることを説明する。

【評価】 古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解しているか、確認する。

■展開

学習活動のポイント

❶「かぐや姫の嘆き」を音読する。思判表B(1)ア

❷ 敬語や省略に注意しながら、現代語訳する。知技(1)ウエ・(2)ウエ　→**「言葉と表現」1**

❸ かぐや姫の言葉を参考に、かぐや姫の悲しみの理由をまとめる。思判表B(1)イ　→**「学習のポイント」1**

❹ 翁の心情の変化を読み取る。思判表B(1)イ　→**「学習のポイント」2**

❺「月の都」と「この世界」との違いを考える。思判表B(1)エ

❶聞いている生徒には場面を想像するように指示する。学習の最後にも内容を理解したうえで、会話部分を工夫するように指導し、音読させてもよい。

【評価】「読むこと」において、文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、音読により、確認する。

❷必要な言葉を補い分かりやすく現代語訳させる。敬語の種類、敬意の方向を説明し、人物関係を押さえさせる。省略を正しく補えるかは部分の解釈を指名して確認できる。敬語についても指名して、意味・敬意の方向などを答えさせる。文脈をたどりながら古文を読む力については主としてペーパーテスト（小テスト・定期考査）で確認する。

【評価】 我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしているか、ペーパーテストにより、確認する。

・文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解しているか、ペーパーテストにより、確認する。
・古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや、古典特有の表現などについて理解しているか、ペーパーテストにより、確認する。
・時間の経過や地域の文化的特徴などによる文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解しているか、ペーパーテストにより、確認する。

❸前半の言葉からは、かぐや姫が月の都の人で、帰らなければならないこと、後半の言葉からは、それがうれしいことではないことをまとめさせ、そこからかぐや姫の心情を考えさせる。

【評価】かぐや姫の心情について、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈しているか、ノートのまとめなどにより、確認する。

❹「問ひ騒ぐ」「泣きののしること、いと堪へがたげなり」「もろともにいみじう泣く」の部分を押さえながら、翁の心情の移り変わりを考えさせる。かぐや姫と翁の心の交流の様子を会話から読み取り、心情についてクラスに問いかけ、発表させる。「かぐや姫の生ひ立ち」との比較も気づいた生徒に発表させ、まとめさせる。

【評価】翁の心情の変化について、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈しているか、発表により、確認する。

❺「片時の間」と「あまたの年」との言葉遣いから分かることを指摘させる。浦島太郎の例などを参考にあげてもよい。

【評価】作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めているか、確認する。

■まとめと発展

学習活動のポイント

❶かぐや姫の人間性がどのように描かれているか、「かぐや姫の生ひ立ち」と比較して考える。知技(2)ア　主態

❶かぐや姫の言葉が翁の心情に沿っていることを読み取らせ、「かぐや姫の生ひ立ち」では、かぐや姫の主体性がほとんど描かれていなかったことと比較させ、考えさせる。召使とのやり取りも参考にできよう。人間の情が前面に表現されていることの意味を、まとめとして生徒に問いかけ、発表させる。また、意見が出にくそうな場合は字数を指定し（一〇〇字程度）、書かせてもよい。

【評価】言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解しているか、確認する。

・進んで「竹取物語」に描かれた人物の心情などを読み取り、学習課題に沿って、かぐや姫が「この国」を去ることを嘆き悲しむ理由を考えようとしているか、発表や意見文により、分析する。

指導上の注意点

●四八ページ

問「八月十五日ばかりの月」（四八・14）とあるが、文脈から考えてここでは、次のうちどれが最も適切か。

(ア)八月十五日の満月　(イ)八月十五日以前の満月に近い月　(ウ)八月十五日以後の満月に近い月　(エ)八月十五日前後の大体満月に近い月　(オ)八月十五日の満月に似ている月

答(イ)

問「いといたく」（四八・14）の(1)「いと」、(2)「いたく」について、それぞれ文法的に説明せよ。

答(1)副詞で、「非常に」「本当に」の意。(2)形容詞「いたし」の連用形で、「ひどく」「激しく」の意。

問「人目も今はつつみ給はず泣き給ふ。」（四八・14）について、

[1]「人目をつつむ」の意味を答えよ。

[2]現代語訳として適当なものを次の中から選べ。

(ア)人目をもはや気になり申し上げずに、お泣きになる。

(イ)人目をようやくはばかられながら、お泣きなさる。

(ウ)人目も今はお気になさらずに、泣いていたい。

語句の研究

●四八ページ

14八月十五日ばかりの　「八月十五日」は底本のもとの写本も漢字表記。「はづきのとをかあまりいつか」「はちぐわつじふごにち」「はづきもち」のいずれで読んでもよい。「ばかり」はおよその範囲を表す副助詞。まだ十五日になっていない。

14月に出でゐて　「月に向かって（屋敷の奥から建物の端近くへ）出て座って」。「月に」の「に」は「出でゐる」の動作の方向を表す格助詞。ただし、これを時を表す格助詞として「（八月十五日くらいの）月の頃に」と解してもよい。また、内容から、「月に」を「月夜に」と解してもよい。

14いといたく泣き給ふ　「いたく」は、「はなはだしい、ひどい」の意の形容詞「いたし」の連用形だが、副詞とする説もある。「給ふ」は語り手からかぐや姫への敬意を表す尊敬の補助動詞。「かぐや姫の嘆き」の地の文で姫に敬語が付くのは、次の文の「つつみ給はず泣き給ふ」までで、その後は「言ふ」「泣く」と敬語がない。「竹取物語」の敬語使用が不安定であることに注意したい。

14人目も今はつつみ給はず　「（八月十五日の直前となり）人目も今はお気になさらずに」。「つつむ」は「物を覆って見えなくする」の意から転じて「人目につかないようにする、遠慮する」の意。かぐや姫は、収録範囲の以前、七月十五日の頃にも月を見て物思いに沈んでいたが、その時には心配する翁に対して「なでう、物をか嘆き侍るべき。」「思ふこともなし。」と答えていた。その時にはまだ悲しみを隠そうとしていたのである。

15何事ぞ　係助詞「ぞ」は文末にあって「…だ、…である」と訳す。「何事ぞある」の「ある」が省略された形とみてもよい。文末の「ぞ」を終助詞とする説もある。

●四九ページ

1さざざき　以前。過去の時。まえまえ。

1必ず心惑はし給はむものぞ　「きっと心をお乱しになるにちがいない。」「心惑はす」は「心を乱れさせる」。「給ふ」は、かぐや姫から親たちへの敬意を表す尊敬の補助動詞。形式名詞「もの」に係助詞「ぞ」が付いた「ものぞ」は文末に用いて強意を表す。

2今まで過ごし侍りつるなり　「今までその

らっしゃる。

(エ)人目もようやく遠慮なさらず、泣き申し上げる。

(オ)人目にも今はつき申し上げないように、泣いていらっしゃる。

答 [1]人目につかないようにする。遠慮する。 [2](ウ)

問 **「今は」（15行目）という言い方は、この前に違う事態があったことを想像させる。その事態を調べよ。**

補 **答** 「語句の研究」「参考」参照。導入の一つのヒントとして、教材に入る前に指示しておくのもよい。「月の顔見るは、忌むこと」などの、興味深い古代人の考え方などに触れることができる。

●四九ページ

問 **「さきざきも申さむと思ひしかども」（四九・1）について、**

[1]「さきざき」は、ここでは次のどれに該当するか。

(ア)ずっと先までの将来　(イ)過ぎ去った時　(ウ)つい最近　(エ)回って行くほう

[2]「申さむ」と思っていたのは、どのようなことか。

答 [1](イ)　[2]自分が月の都の人で、八月十五日の満月の夜には月からの迎えが来て一緒にままで（言わないまま）にしていたのです」。「過ごす」は、ここでは「やり過ごす、放っておく」の意。

2さのみやは　「さのみやは侍らむ」の「侍らむ」の省略と解した。現代語訳では、かぐや姫の会話文全体を敬体で訳すのが適切であろう。以下も、かぐや姫の発言は丁寧語がなくとも敬体で訳した。「やは」は反語。「そうしてばかりでよいでしょうか（いや、よくないでしょう）」。つまり、「ずっとそれでいられましょうか（いや、いられません）」の意。「さ」は前文にある、言わずにいることを指す。

2うち出で侍りぬるぞ　「うち明けてしまうのです」。「うち出づ」は「口に出して言う」の意。「ぬる」は完了の助動詞「ぬ」の連体形。動作が間違いなく完了することを示す。打ち明ける内容の核心部分は、これから言うのだが、間違いなく言うのだという意識を表す。「ぞ」は係助詞「ぞ」の文末用法。係助詞「ぞ」は種々の語に付くが、活用語には連体形に付く。

3おのが身は　「私の身は、我が身は」。「おの」は自称の代名詞。「が」は連体修飾格を表す格助詞。

3この国の人にもあらず　「に」は断定の助動詞「なり」の連用形。ラ変動詞「あり」は、ここでは補助動詞。「に（助詞）＋あり」が全体で断定を表す場合、便宜上「に」を（格助詞ではなく）断定の助動詞と考える。

3月の都の人なり　「月の都」は月の中にある都。『月の都』は、月の世界。月をよい処としてほめていう。『月宮殿』などといわれて、漢籍に、月中に宮殿があるとするのを受けているのだろうか。」（上坂信男「竹取物語全評釈」）との説もある。

3それを　代名詞「それ」と格助詞「を」とから成った一語の接続詞とみる。接続詞「それに」などと同様の成り立ち。ここでは逆接を表す。

4昔の契りありける　「昔の契り」は「前世からの因縁」。現世の生涯は、前世の行いによって決まるというインド古来の思想による。日本には仏教を通してもたらされた。

4まうで来たりける　「まうづ」は「まゐづ（参出）」が縮まった「まゐづ」が転じた語であり、「行く」「来（く）」の謙譲語。「まうで来」は「まゐでく」の転。「参上する」の意。神や貴人のいる場所へ行くことをい

帰らなければならないこと。

問「必ず心惑はし給はむ」（1行目）の主語は誰か。

答 翁と嫗（親ども）

補 翁たちに敬語の「給ふ」を使っていることに注意させる。

問「さのみやはとて、うち出で待りぬるぞ。」（四九・2）について、

1「さのみやは」の下には、どのような語が省略されていると考えられるか。

2 (1)「のみ」、(2)「やは」について、それぞれ文法的に説明せよ。

3 このときの気持ちがそのまま動作になって表れている部分を指摘せよ。

答 1「あらむ」（「過ごすべき」「過ごさむ」など） 2 (1)限定を表す副助詞 (2)反語を表す係助詞 3 人目も今はつつみ給はず泣き給ふ。

補 注で説明しているところを、更にもう一度考えさせておく。

問 ◉「この国」（3行目）「この世界」（4行目）「かのもとの国」（5行目）は、それぞれどこを指すか。

答「この国」「この世界」は人間界。「かのもとの国」は月の世界を指す。

補「この国」「この世界」は「かのもとの国」に対する同じものを指していると考えてよい。

う。ここでは人間界を敬うことになるが、翁・嫗への姫の配慮による表現である。

5この月の十五日　八月十五日。中秋の月を賞玩する風習は、中国文化、特に白居易の詩の影響を受けて、貞観年間（六三七〜六七三）以降文人たちの間から浸透した（「新潮日本古典集成」）。

5かのもとの国　「あの以前の国」。かぐや姫がかつて住んでいた月の都。

5まうで来むず　「むず」は、「む」とほぼ同義だが、「む」よりもやや強調する気持ちが加わる。

6さらず、まかりぬべければ　「さらず」はラ行四段の他動詞「避る」の未然形＋打消の助動詞「ず」。「避けられない、やむをえない」の意。「まかる」は、「出づ」の謙譲語、または「行く」の丁寧語。ここは前者。

6おぼし嘆かむが悲しきことを　「おぼす」は「思ふ」の尊敬語。「思ふ」の未然形に上代の尊敬の助動詞「す」が付いた「思はす」から「おもほす」→「おぼほす」→「おぼす」と転じた語。連用形「おぼし」が他の動詞に上接して、「（心の中で）お…になる、思い…なさる」の意。「む」は、将来に起こることを想定して、「…するこ

とになるかもしれない。そのことが」の意。

8菜種の大きさおはせしを　「からし菜の種の大きさでおありだったのを」。「菜種」は芥子菜（アブラナ科）の種。黒川本「色葉字類抄」に「芥子ナタネ」とあることなどによる。また、「芥子」は「法華経」提婆達多品などで微小な物の比喩とされる（山田孝雄・忠雄・俊雄「昭和校註竹取物語」）。「かぐや姫の生ひ立ち」の「三寸ばかり」（四六・5）とは相違する。翁の誇張した表現である。「を」を逆接の接続助詞と解してもよい。

8わが丈立ち並ぶまで養ひ奉りたる　「私の背丈が同じくらいになるまでに…」と訳せるが、現代語では「私の背丈と同じくらい…」などが自然な言い方。「現代語の語感とは逆の表現である。」（「新潮日本古典集成」）。

9まさに許さむや　副詞「まさに」は「むや」を伴って反語の意。「どうして許せようか（いや、許せない）。」と可能の意を補って訳してもよい。前の「何人か…」と共に、反語を重ねて翁の強い拒否感を表す。

10我こそ死なめ　主語が一人称なので「私こそ死のう。」と解するのがよいが、「こそ…

問　**「昔の契り」（4行目）について、**
[中]「昔の契り」とは、どのような意味か。
[難]「昔の契り」によって現世に存在しているという考え（思想）について説明せよ。

答　[1]前世からの因縁　[2]前世の業（善悪の行為）によって現世に報いを受けるという因果応報の考え方からきた仏教的な思想。

問　**「今は帰るべきになりにければ」（4行目）とは、どこに帰るのか。**

答　月の都（世界）

問　**「おぼし嘆かむ」（6行目）と「思ひ嘆き侍るなり」（7行目）の主語はそれぞれ誰か。**

答　「おぼし嘆かむ」の主語は両親。「思ひ嘆き侍る」の主語はかぐや姫。

補　「おぼす」は「思ふ」の尊敬語で、「思ひ嘆く」という複合動詞の一部を尊敬語で置き換えるやり方。「言ひ明かす」→「のたまひ明かす」、「行き着く」→「おはしまし着く」などの類。翁や嫗が主語のときには、かぐや姫からの敬意を表すために「おぼし嘆く」と尊敬語を用い、かぐや姫自身が主語のときには「思ひ嘆く」と尊敬語が用いられず、「侍り」をつけて聞き手である両親に敬意を表していることに注意する。

問　**「こは、…まさに許さむや。」（7行目）の部分に用いられている敬語を全て抜き出し、敬語の種類および誰に対する敬意表現か、答えよ。**

答　①「のたまふ」尊敬語・かぐや姫　②「（見つけ）聞こえ」謙譲語・かぐや姫　③「おはせ」尊敬語・かぐや姫　④「（養ひ）奉り」謙譲語・かぐや姫　⑤「（迎へ）聞こえ」謙譲語・かぐや姫

問　**「菜種の大きさ」（8行目）について、**
[1][易]竹取の翁が、かぐや姫を最初に見つけたとき、かぐや姫の大きさについてどのように述べられているか。
[2][中]ここで翁が「菜種の大きさ」と言っているのは、翁のどのような気持ちを表していると考えられるか。

答　[1]三寸ばかり　[2]とても小さなときから、精いっぱいの愛情と努力でかぐや姫を育ててきたという気持ち。

問　**「何人か迎へ聞こえむ。」（9行目）を現代語訳せよ。**

答　何者（誰）がお迎え申し上げようか。いや、何者も迎えすまい。

問　**「我こそ死なめ」（10行目）には、翁のどのような気持ちが表れているか。**

答　かぐや姫がこの世からいなくなるくらいなら、自分のほうこそ死んでしまいたいという気持ち。

補　「我こそ…」と言って、相手よりも自分のほうがという気持ちが感じられることに注目して「私が死ぬのがよい。」と解してもよい。

---

11 月の都の人にて、父母あり　「父母月の都の人にてあり」の「月の都の人にて」を強調して前に置いた形の文と解する（上坂信男「竹取物語全評釈」など）。「（私は）月の都の人であって、（そこには）父母がいます。」とも解せる。

12 あまたの年　副詞「あまた」は「数多く、たくさん」の意。ここでは格助詞「の」を伴って連体修飾語になっている。

13 遊び聞こえて　「遊ぶ」は、音楽・遊宴・狩猟など、日常とは別の世界のことに熱中することで、他国や異郷に赴いて過ごすことにも用いた。「聞こゆ」は、かぐや姫から翁たちへの敬意を表す謙譲の補助動詞。

13 慣らひ奉れり　「慣らふ」は、ここでは、「慣れ親しむ」の意。「奉る」は、かぐや姫から翁たちへの敬意を表す謙譲の補助動詞。

14 いみじからむ心地　「いみじ」は善悪を問わず程度の甚だしいことを表す。前に「いみじく泣くを」（四九・7）とあった。「甚だしく…だ」の「…」を文脈から補って解する必要のあることも多い。教科書の脚注は「（月に帰ることが）うれしく思われる

意する。すなわち、月の世界を信じていない翁にとって、かぐや姫が月の都に帰ることは、地上界において死んでしまうのと同じだということになる。

問 **「あまたの年」（12行目）とは、どの表現と対応して言っているのか。**

答 片時の間

問 **「片時の間」（11行目）と言って、「この国にはあまたの年を経ぬる」（12行目）と言っているのは、なぜか。**

答 天上界と地上界とでは、時間の長さが異なり、天上界の僅かな時間が地上界の長い時間に相当するから。

補 人間が神仙界などと往来する話、異郷説話では、時間の違いが重要な構成要素の一つである。浦島伝説の例などをあげて、生徒の理解を深めたい。

問 **「遊び聞こえて」（13行目）とは、ここではかぐや姫がどうしたことを述べているのか。**

答 月の世界から地上の世界へ降りて来て、今まで楽しく過ごしたこと。

問 **「恋しからむことの堪へがたく」（2行目）とあるが、具体的には、どのようなことを「恋しく」思うのか。**

答 かぐや姫の気立てなどに気品があり、愛らしかったこと。

問 **「かぐや姫の生ひ立ち」「かぐや姫の嘆き」を通して、「かぐや姫」は、どのような女性として描かれているか。**

答 美しく神秘的な月の世界の女性であるが、気立てがよく、上品で、人間的な悲しみがよく分かる女性。

問 **月の世界と人間の世界の最も大きな違いは何か、分かりやすく説明せよ。**

答 月の世界での「片時」が、人間の世界では「あまたの年」に当たるように、時間や命の長さが根本的に違うこと。

とを　「心ばへ」は、外に表れた心の働きで「性格、気立て」の意。「あてやかなり」は「上品である、高貴である」の意。「やか」は形容動詞語幹を作る接尾語。

2見慣らひて　「見慣らふ」は「いつも見てなじむ、見慣れる」の意。

2恋しからむことの堪へがたく　「恋しく思われるだろうことがこらえきれそうになく」。「む」を推量で解したが、仮定と考えてもよい。かぐや姫と別れた後の未来を想像する召使たちの心の動きに即した地の文。

2湯水飲まれず　悲嘆のために必要最小限のことさえできないことをいう。

3同じ心に嘆かしがりけり　「同じ心に」は「（召使たちが、翁・嫗と）同じ思いで」の意。

14悲しくのみある　「悲しいだけです」。ラ変動詞「あり」は、ここでは補助動詞。疑問の語や係助詞などがなく、「…ある」と連体形の文末であるのは余韻を残して詠嘆する言い方。「まかりなむとする」（四九・15）も同様。

●五〇ページ

1立ち別れなむことを　「同じ心に嘆かしがりけり。」（五〇・3）に続く。

1心ばへなどあてやかにうつくしかりつるこ　気持ち。」としたが、「とてもうれしいような感じ」と訳してもよい。実の父母のいる故郷へ帰るのにうれしくもないといって、翁・嫗への愛着を示す。

鑑賞

かぐや姫は、難題によって五人の貴公子たちを退け、さらに、帝の求愛にも応じなかった。姫は、なぜ地上のあらゆる男を拒むのだろうか。かぐや姫の正体は何者なのか。こうした疑問に答え、物語を山場へ導くのが、「かぐや姫の嘆き」の収録部分である。

この場面は会話を中心に構成されている。「泣く泣く」かぐや姫は語り続ける。自分はこの国の人間ではなく月の都の人であり、今は帰るときになったので迎えが来るというのが、かぐや姫の告白の核心部分であり、かぐや姫の正体が明かされ、天人女房譚の話の型に沿った結末への道筋が開かれる。

この場面の読み所は、明かされた秘密の内容に留まらない。別れが必然的な状況で深まる親子の情愛が重要である。かぐや姫は、これまで黙っていたのは、翁・嫗を嘆かせないためだったと言い、必ず去らなくてはならないので、翁たちを嘆かせてしまうのが悲しいと述べる。「おぼし嘆かむが悲しきこと」とあるように、かぐや姫は、翁たちの嘆きを想像して悲しむ。相手がどう思うかを思いやり、心を動かす優しい人物像が形作られる。

一方、姫から別れを告げられた翁は、激しく取り乱し、姫は竹から見つけたものの、ここまで育てた「我が子」だと誇張を交えて主張する。「かぐや姫の生ひ立ち」の「三寸ばかり」「すくすくと大きになりまさる。三月ばかり…」との相違や、反語の繰り返し、「我こそ死なめ。」という発言の激しさに注意したい。翁の言動もまた、深い情愛の結びつきを表現する。

かぐや姫は、実の父母が月にいると告げる。翁を納得させるためと読める。しかし、すぐさま続けて、翁の言葉に応じて、翁・嫗に長い間慣れ親しんだことを述べ、月に帰ることはうれしくも思わない、悲しいだけだが、しかし、「おのが心ならず」行くのだと言う。翁たちへの愛着を強調して対話の相手である翁の心を和ませ、説得するように働きかける。

かぐや姫は、前世からの因縁があったので、人間世界にやって来たと述べていた。本教科書の収録範囲外であるが、月から来た迎えの使者は、かぐや姫は罪を犯したので、翁のもとにしばらく滞在していたのだと言う。月の人かぐや姫にとって、地上の人間世界は流刑地だったが、そうした言い方を姫は翁たちに対してしない。むしろ「まうで来」と人間界を尊重している。また、かぐや姫は、僅かの期間だと思って人間界に来たが、こちらでは長い期間を過ごすことになったという。ここに、月世界と人間界との時間の流れの相違が表れている。異界での短期間が、人間界では長期間になることは、浦島伝説や爛柯の故事（「述異記」など）に共通する異界の性質である。

かぐや姫がいなくなると聞いて、召使たちも悲しむ。かぐや姫の人柄ゆえだという。姫は多くの人に愛されていた。それにしても、「湯水飲まれず」とは、かぐや姫に心を奪われている。本教材の範囲には現れないが、もう一人、姫に心を奪われている人物がいる。帝である。帝は、かぐや姫一人を引き留めるために、二千人もの兵士を翁の家に派遣する。物語は、結末に向けて、大がかりな場面を用意するのである。

参考

「かぐや姫の嘆き」収録前部

春のはじめより、かぐや姫、月のおもしろく出でたるを見て、常よりも、もの思ひたるさまなり。ある人の、「月の顔見るは、忌むこと。」と制しけれども、ともすれば、人間（ひとま）にも月を見ては、いみじく泣き給ふ。

七月十五日の月に出で居て、せちにもの思へる気色なり。近く使はるる人々、竹取の翁に、告げていはく、「かぐや姫の、例も月をあはれがり給へども、この頃となりては、ただごとにも侍らざめり。いみじくおぼし嘆くことあるべし。よくよく見たてまつらせ給へ。」と言ふを聞きて、かぐや姫に言ふやう、「なんでう心地すれば、かくものを思ひたるさまにて、月を見給ふぞ。うましき世に。」と言ふ。かぐや姫、「見れば、世間心細くあはれに侍る。なでう、ものをか嘆き侍るべき。」と言ふ。

かぐや姫のある所に至りて見れば、なほもの思へる気色なり。これを見て、「あが仏、何事思ひ給ふぞ。おぼすらんこと、何事ぞ。」と言へば、「思ふこともなし。ものなむ心細く覚ゆる。」と言へば、翁、「月な見給ひそ。これを見給へば、ものおぼす気色はあるぞ。」と言へば、「いかで、月を見ではあらん」とて、なほ月出づれば、出で居つつ嘆き思へり。夕闇には、もの思はぬ気色なり。月のほどになりぬれば、なほ時々はうち嘆きなどす。これを、使ふ者ども「なほ、ものおぼす事あるべし。」とささやけど、親をはじめて何事とも知らず。

（新日本古典文学大系）

《板書例》時間感覚の違い

かの国（月の世界）
片時の間
←――→ 違い
この国（人間界）
あまたの年
cf 浦島伝説

《板書例》　かぐや姫が泣いている理由

・自分はこの国の人ではない
・八月十五日に月から迎えに
　人々が来て、この国を去ら
　なければならない
　⇦
育ての親である翁と嫗が
お嘆きになるのが悲しい

《板書例》　登場人物の心情

○かぐや姫
- 悲しきこと（四九・６）
- 悲しくのみある（四九・14）
- まさに許さむや（四九・９）
- 我こそ死なめ（四九・10）

○翁
- 恋しからむこと（五〇・２）

○使はるる人々

深い学びのために

学習のポイントの解答例

1 **「悲しくのみある。」（四九・14）とあるが、かぐや姫が悲しんでいるのはなぜか、まとめてみよう。**

【答】 地上で長い年月暮らしてきたことと、地上の父母（翁・嫗）にも親しんできたことから。

▼ポイント▲　かぐや姫の言葉の中であるから、その言葉の内容をまとめることになる。月の世界と地上とが、「片時の間」（四九・11）と「あまたの年」（同・12）、「父母のこともおぼえず」（同・13）と「久しく遊び聞こえて、慣らひ奉れり」（同・13～14）のように対比されている。

2 **かぐや姫の話を聞いた翁の心情はどのようなものであったか考え、その心情を効果的に表している部分を、本文中から指摘してみよう。**

【答】 実際には「三寸ばかり」の大きさのかぐや姫を見つけたのだが、「菜種の大きさ」（四九・8）と言っているところから、たいへん小さいときから大切に育てたという、親としての愛情がうかがわれる。さらに、「まさに許さむや」（同・9）と強い言い方をしているところから、育て上げた自分たちこそが親であるという自負が感じられる。

▼ポイント▲　見つけた子を育てたのであるから、実際の親ではないことは明らかである。しかし、育て上げたことを実際の親以上に親としてふさわしいと翁は考えているのである。

言葉と表現の解答例

1 **次の傍線部「に」を、それぞれ文法的に説明してみよう。**

(1) **おのが身は、この国の人にもあらず。（四九・3）**

(2) **今は帰るべきになりにければ（四九・4～5）**

(3) **まさに許さむや。（四九・9）**

【答】 (1)　断定の助動詞「なり」の連用形　(2)　変化の結果を表す格助詞　(3)　副詞の一部

▼ポイント▲　(1)助動詞「なり」が「に」＋「あり」に分割され、間に「も」が入って強調された形。「に」の下に「あり」が出てくる場合はこのケースを考える。(2)「～になる」という変化の結果を表す格助詞。下に「なる」という動詞がある場合はこれを考えてみる。(3)「まさに」という副詞の一部。

言語活動の解答例

1 **かぐや姫が、「この国」を去るのを嘆き悲しむのはなぜ**

か。その理由を考え、話し合ってみよう。

【答】かぐや姫はこの国で長く暮らすうちに、月の都の両親のことも思い出さず、この国に慣れ親しんだ。後に残す養い親たちの悲嘆を考えると悲しみを抑えられないため。

▼ポイント▲　本文の「かの国の父母のこともおぼえず、ここには、かく久しく遊び聞こえて、慣らひ奉れり。いみじからむ心地もせず、悲しくのみある」（四九・13）や、「さらず、まかりぬべければ、おぼし嘆かむが悲しきことを、この春より、思ひ嘆き侍るなり。」（四九・6〜7）が直接の根拠となる箇所。「片時の間とて、かの国よりまうで来しかども、かく、この国にはあまたの年を経るになむありける。」（四九・11〜12）とあるように、月の世界ではわずかな時間でも、地上では人々と慣れ親しむ十分な時間を過ごしている。時間の経過の差に関しては、浦島伝説なども想起される。かぐや姫は地上で過ごした長い時間の中で人間的に豊かな心情を持つようになり、育ての親との関係性も深まったと予想される。

（植田　敦子）

古文を読むために　5

助詞は助動詞と違って、現代語と共通するものも多い。現代語と同じものは注意を払う必要がない。したがって、古文の助詞の学習はポイントをしっかり押さえて、必要なものだけを重点的に学んでおけばよいだろう。その中で、係助詞は古文特有のものであるが、これに関わる「係り結び」は比較的初期の段階で学習しているだろうから、確認程度で済ませることができる。このくらいになると紛らわしい語の識別などを頭に入れながら、今まで学習した文法的知識を整理して、体系づけていけるとよい。

1 助詞

活用のない付属語を助詞という。多くの助詞は一音節か二音節のものであって、「が・の・を・に・へ・と・ば・て・ど・で・し・は・も・ぞ・や・か・な・そ・よ・にて・して・より・から・とも・ども・つつ・だに・すら・さへ・のみ・まで・など・しも・なむ・こそ・ばや・がな・かな・かも・かし」がある。ちなみに三音節のものは「ながら・ものの・ものを・ばかり・てしが・にしが・もがな」、四音節のものは「ものから・ものゆゑ・てしがな・にしがな」がある。助詞は語としては小さいが、文法的な表現では重要な働きを果たし、この語一つで意味が全く正反対になることもある。助詞はその働きによって六種類に分けるのが一般的である。これは山田孝雄の説によるものである。

助詞を身につけるには、まず、数の少ない係助詞・副助詞・間投助詞は暗記してしまうのがよい。次に主に体言や準体言に付くのが格助詞。そして活用語に付くのが接続助詞（「ながら」だけは体言にも付く）、さらに、文末に来るのが終助詞という区別がある。

◎語と語、文節と文節の関係を表すもの

●格助詞　語と語、特に名詞（または体言相当語）と動詞とを結び付けて、その関係を表すことをその役割とする。「格」とは、体言が同じ文中の他の語に対して持つ関係のことである。「格」には次の四種類がある。

1　主格（主語となる資格を表す）
2　連体修飾格（体言を修飾する資格を表す）
3　連用修飾格（用言を修飾する資格を表す）
4　同格（上と下が同等である資格を表す）

特に、連用修飾格になる場合、動詞の意味と関連しつつそれぞれに働きを持つことになる。例えば場所・時間を表したり、動作の対象を表したりする。それぞれの助詞により特定の用法があるので、丹念に辞書や文法書を読みながら確認するとよい。

●接続助詞　活用語に付いて、後に続く述語と、順接または逆接、あるいは単なる接続、といった関係のあり方を表す。接続助詞は接続の仕方によって次の五種類に分類することができる。

1　順接の仮定条件
2　順接の確定条件
3　逆接の仮定条件
4　逆接の確定条件
5　打消接続

この中で、注意を要するものがいくつかある。まず「ば」は未

然形に接続する場合は1となり、已然形に接続する場合は2となる。したがって、何形に接続しているかを正確に見分ける必要がある。次に打消接続の「で」（未然形接続）だが、これはもともとは打消の助動詞「ず」の連用形に接続助詞の「て」の付いた「ずて」が一音化したもので、「ナイデ」と現代語訳することができる。動詞が音便化したものに付く「て」が濁音化した打消の意味を含まない「で」（連用形接続）と紛らわしいことがある。三番目に「が」「を」「に」の中には格助詞と区別が付きにくいものがある。この例に限ったことではないが、助詞の意味・用法を一つ一つ機械的に暗記するのではなく、前後の文節や文の意味内容と関連させて理解するようにしていけば、徐々に見分けが付くようになることに気づかせるとよい。

◎文にさまざまな意味を添えるもの

●副助詞　種々の語に付いてそれに、限定・程度・添加・例示・類推・強意などの意味を添えるものである。「だに」「すら」「さへ」は訳語とともに覚えておくのが便利である。

だに　…セメテ…ダケデモ（最小限の限定）、…デサエ（類推）
すら　…デサエ（類推）
さへ　…マデ〈モ〉（添加）

特に「さへ」を「サエ」と訳すと文意が変わってしまう場合が生じるので注意が必要である。

●係助詞　種々の語に付いてそれに、強意・疑問・反語などの意味を添えるものである。古文に特有の助詞である。「ぞ」「なむ」「や」「か」「こそ」によって引き起こされる「係り結び」こそ、古文を特徴づけるともいうことができる。しかし、この「係り結び」も鎌倉時代の頃から連体形が終止形の働きを持つようになり、連体形の持つ意味が希薄になったことから、「係り結び」が持っていた価値がなくなり、衰えてしまったのであった。係助詞「は」「も」は意味の上から係助詞に分類する。つまり、この助詞を含む文節が、文の述語と係わる点がポイントとなる。「は」と「が」は特に同じように用いる感じがするが、例えば「勉強はしたい」という時に「は」は主格を表すのではないことが「が」と用法が異なる大きな点である。しかし、「は」「も」を用いた文は終止形で終止し、係り結びは成立しない。「は」が格助詞「を」の下に付くと、「をば」と濁音化する。接続助詞の「ば」と混同しないようにしたい。また、「も」に係助詞の「ぞ」「こそ」が付いた「もぞ」「もこそ」という形は「…すると困る・…したら大変だ」という不安や心配を表す言い方となる。

●終助詞　種々の語に付いてそれに、禁止・願望・詠嘆・念押しの意を添えて文を終わらせる働きを持つ。原則的には文末に置かれるが、引用を導く格助詞（「と」「とて」）や副助詞（「など」）の上でも文が終止している場合があり、その時にはその位置に終助詞が置かれることもあるので注意する。

●間投助詞　文節末に付いて、詠嘆・強意・呼びかけの意味を担う。終助詞と間投助詞の区別は容易ではない。文中の文節末に付く場合は間投助詞と考えられるが、文末に付いた時には区別しにくい。「を」「や」「よ」が間投助詞であると覚えて対応するしかない。

2 注意すべき言葉遣い

◎副詞の呼応

副詞の用法の中で、修飾される文節に、打消・推量・疑問・反語・仮定・願望・当然・禁止・比況などを表す語を要求し、その叙述と呼応する場合である。このような用法を持つ副詞を陳述の副詞（あるいは呼応の副詞・叙述の副詞）と呼ぶ。

打消と呼応するもの　あへて　いさ　いまだ　え
必ずしも　さらに　たえて　つゆ
よも　をさをさ

推量と呼応するもの　あるいは　いかばかり　おそらく
けだし　さだめて　むべ

疑問と呼応するもの　いかで　いかに　なぞ　など
なにゆゑ　なんぞ

反語と呼応するもの　あに　いかが　いかで　いはんや
など

仮定と呼応するもの　たとひ　もし　よし

願望と呼応するもの　いかで　なにとぞ　願はくは

当然と呼応するもの　すべからく　まさに　よろしく

禁止と呼応するもの　な　ゆめ　ゆめゆめ

比況と呼応するもの　あたかも　さながら

このような陳述の副詞の中で、疑問・反語を表すものがある時には、文末が連体形となる。係り結びとも関連する場合があり、分かりにくいものもあるので、頭に入れておくとよい。

◎形容詞・形容動詞の主な語幹用法

形容詞・形容動詞の語幹には次のような特別な用法がある。これは動詞の語幹よりも独立性が高いためであると考えられている。形容詞のシク活用の場合は、ここでいう語幹とは終止形の形をいうので注意が必要である。

- 単独で用いられて感動表現になる。多くは上に感動詞を伴っている。
- 格助詞「の」が付いて、連体修飾語になる。これも感動的な表現となる。
- 「形容詞の語幹＋み（接尾語）」で、原因・理由を表す連用修飾語になる。多くは上に「体言＋を」を伴い、全体で「（体言）が…ので」という意味になる。
- 接尾語が付いて、他の品詞となる。

「さ」「み」が付いて名詞となる。

「がる」が付いて動詞となる。

形容詞の場合「げ」が付いて形容動詞となる。

（畠山　俊）

古文の窓❷

古典文学と月

教材のねらい

月の満ち欠けを基準とする旧暦や、月に関わる伝説や風習、信仰について理解を深め、物語や和歌、発句を鑑賞する力を養う。

特に『竹取物語』「かぐや姫の嘆き」にある「八月十五日」が旧暦では夏ではなく秋の一日であり、その夜の月はほぼ満月であることに気づかせたい。また、江戸時代の月見や月待の行事について学ぶことを通じて、月が信仰の対象となっていたことを理解させたい。

単元の言語活動３では、月の呼び名を調べ、月が詠まれた和歌を鑑賞する課題に取り組む。この活動をしやすくすることも、この教材のねらいの一つである。

解説

現代でも、満月の美しさがニュースになることはしばしばある。しかし、日常生活のなかで月の光の明るさを実感する機会はどれほどあるだろうか。新暦に親しんでいる私たちは、空に浮かぶ月を見て、ただちに月齢を言い当てられるだろうか。

この教材では、①旧暦、②秋の月を詠んだ和歌、③八月十五日の月見、④蕪村の句、⑤月待の行事、という五つの話題を取り上げている。以下、順に解説したい。

①旧暦

現代の私たちが使っている暦は、太陽の動きを基準とする新暦である。これが普及する明治期より前は、月の満ち欠けを基準とする旧暦が使われていた。

月は、日ごとに形が変わる。つまり旧暦を使っている社会では、月の形を見ることで、人々は今日が何日であるかを察することができた。

また、新暦では一年は三六五日で十二ヶ月、一ヶ月は三十日または三十一日であり、二月だけが二十八日である（四年に一度、二月が二十九日となり、一年が三六六日となる）。旧暦では、閏月がない場合は一年は十二ヶ月、一ヶ月は二十九日または三十日である。旧暦と新暦は概ね一ヶ月ずれている。

『竹取物語』では、八月十五日に月の都の人々がかぐや姫を迎えに来ることになっている。旧暦の八月は秋である。また、十五日の月は概ね満月である。旧暦の八月十五日は、新暦では九月の中旬（年によって日付は異なる）にあたり、いわゆる「中秋の名月」の日として知られている。かぐや姫が月に戻るという劇的な出来事が起こる日として、いかにもふさわしいといえよう。

『竹取物語』を読む際は、これらのことを理解したうえで、情景を想像させたい。

②秋の月を詠んだ和歌

秋の月がとりわけ美しいものとして詠まれてきたことを、二首の和歌によって確かめたい。

久方の月の桂も秋はなほもみぢすればやてりまさるらむ

「久方の」は「月」にかかる枕詞である。「月の桂」は月に桂の

木があるという伝説をふまえている。「もみぢする」は紅葉する意である。この和歌では、月にあるという桂の木が秋になって紅葉している様子を想像し、月の輝きに紅葉の美しさが加わっているので、月がいつもより明るいのであろうか、と詠んでいる。

心こそあくがれにけれ秋の夜の夜深き月をひとり見しより

「心」は自分の心である。「あくがる」は離れてさまよう意であり、「夜深し」は深夜であるという意である。この和歌の大意は、秋の深夜に、月をひとりで見ていたら、心が我が身から離れてしまった、というものである。月があまりに美しく、知らず知らずのうちに心が引きつけられてゆく状態を、たくみに表現した和歌と言えよう。

③八月十五日の月見

『竹取物語』の「八月十五日」に関連して、月見の風習と月の呼び名について理解させたい。九月十三日の月を「豆名月」「栗名月」と呼ぶのも、八月十五日の月を「芋名月」と呼ぶのと同様に、月に枝豆や栗を供えることに由来している。

月が、単に美しいものとして愛でられるだけではなく、季節の収穫物を捧げる対象となっていることに気づかせたい。

④蕪村の句

山茶花の木の間見せけり後の月

この句には、「山茶花」と「後の月」の二つの季語が含まれている。「山茶花」はツバキ科の常緑樹で、花は新暦の十月から十二月に咲く。冬の季語である。「後の月」は陰暦の九月であるから、秋の季語である。つまりこの句は、季節が異なる二つの季語が詠み込まれた、季重なりの句である。

こうした場合、一句のなかで、どちらの季語に重きが置かれているかを見きわめる必要がある。

この句の場合は、「後の月」が句の中心にある。詠まれている景色は、後の月が明るいので、山茶花の木々の隙間が見えるというものである。かりに山茶花ではなく別の樹木を詠んだとしても、句としては成り立つかもしれない。しかし、庭木として鑑賞される山茶花が詠まれているからこそ、詠者が庭で後の月を見上げている様子が明瞭に想像できる句になっている。

⑤月待の行事

「月待」は、決まった月齢の夜に人々が集まり、月の出を拝む行事である。

この教材で紹介した江戸時代の「二十六夜待ち」は、陰暦の正月と七月の二十六日の夜に月の出を拝むもので、月の光の中に弥陀・観音・勢至の三尊が現れると言い伝えられていた。

ちなみに江戸時代には、決まった日の朝に日の出を拝む「日待」の行事もあった。現代でも、元旦に初日の出を拝む風習が残っている。

江戸時代の月待は、月の出を拝むという民間信仰と、人々が集まって共に飲食を楽しむという娯楽とが融合した行事である。ポイントは、月が出るまで待つことと、その待つ時間を楽しむことにある。

現代では、月の出を待つという行為そのものが、ほぼ忘れられてしまっているかもしれない。しかし、「月待」の行事や、単元の言語活動3で扱われる「立待月」「居待月」「臥待月」という月の呼び名は、月の出を待つということが、往事の人々においては

日常の習慣の一部であったことを思い出させてくれる。

鑑賞

日が沈んだ後、月の出ていない状態がいかに暗いかということは、街灯などの発達した現代ではなかなか実感しにくいものである。

「宵闇」ということばがある。夕方の暗さを意味する場合と、陰暦の十六日から二十日頃、月の出が遅く宵のあいだが暗いことを意味する場合とがある。後者の場合、月が出る前に外を歩くとしたら、足下を照らす明かりがないと心許ない。

このことを念頭に置いて、江戸時代の噺本『聞上手』（安永二年刊）にある「提灯」という小噺を鑑賞してみたい。本文は、武藤禎夫校注『安永期小咄本集』（岩波文庫、岩波書店、一六七年）、によった。

友、遠方より来たることあり。何かのはなしに日を暮らし、「もうお暇申します」と立ちかかれば、亭主、「これは〳〵お残り多い。それ、灯を見せませい。イヤほんに、宵闇じやから、提灯をあげ申せ」「イヤ、それには及びませぬ。サア、お入りなされませい」といふ内に、女房が提灯をとぼして持つて出で、「ひらに、持つておいでなされませ」と差しいだすを、亭主見て、「アヽ、それは大ぶん古い」「イエ〳〵、どのやふに古ふても、よふござります」「それでもあんまりじや」といへば、女房、そばから、「ナアニ、夜だから御堪忍あそばせ」。

ある家の亭主のところに、友人が来て、話をしているうちに日が暮れてしまった。友人が「もうおいとまします」と帰ろうとすると、亭主は「お残り多い」と名残を惜しみ、外は宵闇だからと、提灯を用意するよう女房に言い付ける。友人は「それには及びません」と辞退する（「お入りなされませい」というのは、亭主が玄関まで送りに出ているので、友人が亭主に家の中に入ってくださいと促しているのだろう）。そのうちに、女房が提灯に火を入れて持って来て、友人にどうぞと差し出す。それを見た亭主が、「その提灯はずいぶん古い」というので、友人は「いやいや、どんなに古くてもかまいません」といい、亭主は「それでもあんまりだ」という。すると女房が「夜だから、がまんしてください」と言った。

宵闇だから提灯を差し上げるという亭主の申し出を、友人はいったん辞退しているが、実際に提灯が差し出されると、断らずに受け取ろうとしている。月の光のない宵闇には、提灯の明かりがありがたいものだったことがよくわかる。古い提灯を差し上げるのは失礼だという亭主と、それでもかまわないという友人に対して、提灯が古かろうと暗くて見えないのだからがまんしてくれという女房の言い分がおもしろい。

参考

国立天文台のウェブサイトの「暦計算室」には、「今日のこよみ」があり、月の出と月の入りの時刻などがわかる。

https://eco.mtk.nao.ac.jp/koyomi/

これを参考にして、月の出の時刻を調べ、実際に月の出を待つ「月待」の体験をしてみてもよいだろう。

（佐藤　至子）

単元の言語活動３
月が詠まれた和歌を鑑賞する

活動のねらい

古来から古典には月に関する表現が多く見られ、また月を詠んだ歌も多い。それだけ日本人は月と密接なかかわりがあったと考えられる。

この活動では、古典文学と月の関係について理解し、その上で月が詠まれた和歌を鑑賞し、昔の人が月に込めた思いについて調べ、発表し主体的な学びを深めていくことがねらいである。具体的には、月の様々な呼び名を調べたり月が詠まれた和歌を鑑賞したりすることにより、日本人の月に対する繊細な感性を知るとともに、月と人々の生活がより密接であったことにも気づかせたい。また月が詠まれた和歌を鑑賞することで、古の人が月を見て何を感じていたかやどのように歌に詠んできたかを捉えさせたい。それらの学習を調べ学習やグループでの話し合いを通じて行うことで、主体的に学び、相互に学びを深めていきたい。

タイトル・序文の解説

日本では明治期に至るまで長い間太陰暦を使用しており、月と人々の生活は密接に関係があった。満月のみならず様々な月の形、あり様を鑑賞する文化が日本にあったことが月の呼称や和歌の多さからうかがえる。まず、古典文学と月の関係について理解し、その上で月が詠まれた和歌を鑑賞し、昔の人が月を鑑賞の対象とするだけでなく、月にさまざまな心情を託してきたことを調べ学習や話し合い、発表での共有を通して理解することを期待した活動である。

「課題」の解説

課題　**月の呼び名を調べ、月が詠まれた和歌を鑑賞してみよう。**

月の呼び名を調べるとともに、月が詠まれた百人一首の歌を鑑賞していく。

「活動」の解説

1　**月の呼び名を調べてみよう。**

①「陰暦月齢表」（三五八ページ）を見て、日付ごとに月の呼び名がどのように変わるか、確認する。

基本的には、三五八ページを見て、簡単に確認すればよいが、次にあげるものは、教科書三五八ページに掲載されている以外のものも含んでいる。

知技(2)イ

日付	月の呼び名
30日（1日）頃	新月、朔
2日頃	二日月
3日頃	三日月
7日頃	七日月、上弦の月
10日頃	十日余りの月、十日夜
13日頃	十三夜月、小望月
15日頃	満月、望月
16日頃	十六夜月
17日頃	立待月
18日頃	居待月
19日頃	寝待月、臥待月
20日頃	更待月、亥中の月
23日頃	二十三夜月、下弦

②「立待月」「居待月」「臥待月」の呼び名の意味を調べる。

それぞれ辞書等で調べ、ワークシートに記入し、発表を通じて共有する。

「立待月（たちまちづき）」…陰暦17日の夜の月で、「立ちながら待つうちに出てくる月」の意。およそ19時頃出てくるため、「立ったまま待つ間にほどなく出てくる月」というところからついた呼び名。主として8月の月について言う。「立待（たちまち）の月」とも。

「居待月（いまちづき）」…陰暦18日の夜の月で、この夜の月の出は20時頃で遅く、座してその出を待ったところから出た名前。萬葉集では「座待（いまち）月」という表記で出てくる。特に仲秋の名月に続く18日の月のことを言う。「居待ちの月」とも。

「臥待月（ふしまちづき）」…陰暦19日の夜の月。この夜の月のでは21時頃で、「出るのが遅いから伏し（寝て）て待つ月」の意。寝待月（ねまちづき）とも言う。

③「有明の月」とは、どのような月を言うのか、調べる。

辞書等で調べ、ワークシートに記入し発表し共有する。

有明の月（ありあけのつき）

陰暦16日以降の、夜明けに空に残る月のことを言う。夜更けに昇ってきて、夜明けまで西の空に残っている月。和歌によく詠まれる。参考までに百人一首で「有明の月」が詠ま

れた歌をあげておく。

・いま来むと言ひしばかりに長月の有明の月を待ち出でつるかな　（一一番　素性法師）

・有明のつれなく見えし別れより暁ばかり憂きものはなし　（三十番　壬生忠岑）

・朝ぼらけ有明の月と見るまでに吉野の里に降れる白雪　（三十一番　坂上是則）

秋の夜長に恋人を待つ象徴として詠まれたり、共寝した男女が分かれる暁の時の月として詠まれたりと恋の場面で詠まれることが多いが、三十一番の歌のように純粋な叙景で詠まれる例もある。

▼評価のポイント▲　古典の世界に親しむために、月の呼び名を知るとともに、それらの呼び名がどのような背景から出てきたのか理解しているか、発表や言語活動ＷＳを確認し、分析する。

2　**次の『百人一首』の和歌ア～ウについて、①～③の手順で鑑賞してみよう。**

ア　月見れば千々にものこそかなしけれわが身一つの秋にはあらねど　（二十三番　大江千里）

イ　有明のつれなく見えし別れより暁ばかり憂きものはなし　（三十番　壬生忠岑）

ウ　夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月宿るらむ　（三十六番　清原深養父）

①　六つのグループを作る。グループＡ・Ｂのメンバーはア、グループＣ・Ｄのメンバーはイ、グループＥ・Ｆのメンバーはウを「持ち歌」とする。グループ内で「持ち歌」について、「現代語訳」「月がどのようなものとして詠まれているか」を話し合い、文章でまとめる。

クラスの人数にもよるが、四〇人の生徒がいた場合、たとえば席の近い人で6～7人のグループができ、そこでA～Fを割り振る。Ａ・Ｂにはア、Ｃ・Ｄにはイ、Ｅ・Ｆにはウの歌を持ち歌（担当する歌）として割り振る。グループ内で歌の解釈について調べた上で、月がどのようなものとして詠まれているか話し合い、ワークシートに記入する。

②　グループを解体し、「持ち歌」ア・イ・ウのメンバーを必ず含む新しいグループを作る。新しいグループ内で、①でまとめた各自の「持ち歌」についての文章を発表する。

新しいグループは、いくつできてもよい。ア・イ・ウそれぞれ1人ずつで3人が最小の人数とする。グループ内で発表する。

③　ア～ウを比べた感想を新しいグループごとに発表する。

三首を比べた感想をワークシートに記入し、クラス全体に

共有できるよう発表する。

▼評価のポイント▲　進んで調べ学習やグループでの話し合い、発表を行い、古典文学と月との関係について理解し、月が詠まれた歌に対する理解を深めているか、行動を観察し、言語活動ＷＳの記入を確認し分析する。　主態

3　**『百人一首』の中から、ア～ウ以外で月が詠まれた和歌を一首選び、「月がどのようなものとして詠まれているか」について考え、鑑賞してみよう。**

まず便覧等を活用し全体で何首あるか確認する。全部で十首あるはずである。それぞれの歌について、分担などして歌の意味と月がどのようなものとして詠まれているか考えていく。月がどのようなものとして詠まれているか統一したものとして出すことは難しいが、生徒の自由な発想も生かしながら、まとめていく。　思判表Ｂ⑴オ

具体的には、以下の歌がある。

①七番　阿倍仲麻呂
天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも
（大空をはるか遠くまで眺めると月が輝いているが、あれは昔、奈良の三笠山に出ていた月と同じ月なのだなあ）
月は離れていても同じ月を見ていると連想させ、離れたところにいる人やものをつなぐものとしての役割がある。

②二十一番　素性法師
いま来むと言ひしばかりに長月の有明の月を待ち出でつるかな
（すぐに行こうとあなたが言ったばかりに、九月の秋の長い夜を、有明の月が出るまで待ってしまったことですよ。）

③二十三番　大江千里
月見ればちぢに物こそかなしけれわが身ひとつの秋にはあらねど
（月を見るといろいろと悲しさが感じられることだ。私一人を悲しませるために秋が来るのではないけれども）
月は物思いをさせるものとして詠まれている。

④三十六番　清原深養父
夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月宿るらん
（夏の夜は短く、まだ宵だと思っているうちにもう明けてしまったが、それではいったい雲のどの辺りに宿っているのだろう。）
古今和歌集の夏一六六詞書に、「月のおもしろかりける夜あか月がたに詠める」とある。叙景的な歌で、美しい月が夜明けが来て光が薄れるのを惜しんでいる。

⑤五十七番　紫式部
めぐり逢ひて見しやそれともわかぬまに雲がくれにし夜半の月かな
（久しぶりに出会ったが、あなたかどうか見分けもつかぬ間に

帰ってしまった。たちまち雲に隠れてしまった夜中の月のように）

『新古今和歌集』雑一四九七詞書には、子供の頃の友人と久しぶりに出会ったが、月が沈むのと先を争うように帰っていたので詠んだ月がすぐ雲に隠れたので詠んだ、とあり、美しい月が隠れてしまったのを惜しんでいて、友人がすぐ帰ってしまい残念だった気持ちを重ねている。

⑥五十九番　赤染衛門

やすらはで寝なましものをさ夜ふけてかたぶくまでの月を見しかな

（もしあなたとのお約束がなかったなら、ためらわずに寝てしまったでしょうに、おいでをお待ちしているうちに夜が更けて、西の空に沈みかかる月まで見たことでしたよ）

『後拾遺和歌集』恋六八〇の詞書によれば、藤原道隆がある女性に約束しておきながら訪ねなかったので、翌朝作者がその女性に代わって詠んだ歌とされている。秋の夜の長い時間の経過を月によって表し、男の訪れを待つ女性のせつない思いが詠まれている。

⑦六十八番　三条院

心にもあらで憂き世にながらへば恋しかるべき夜半の月かな

（本心からではなく、このつらい世に生きながらえていたなら、今夜見るこの夜半の月が唯一の友として恋しく思われることだろうなあ）

作者は第六十七代の天皇であるが、病気で眼も悪く、在位中の五年間二度にわたって内裏が炎上するなど不運に見舞われた。藤原道長が退位させようとして圧迫を加えたこともあり、作者の暗い心境が月を唯一の友とみなす歌となって表れている。作者の孤独な状況が投影されている。

⑧七十九番　左京大夫彰輔

秋風にたなびく雲の絶え間よりもれ出づる月の影のさやけさ

（秋風に吹かれてたなびき、横に細く流れている雲の切れ間から漏れ出てくる月の光の、何とまあ、明るく澄み切っていることだろう。）

瞬間的な美を捉え格調高く詠みあげられた上で、月は清く澄んだものとして詠まれている。

⑨八十一番　後徳大寺左大臣

ほととぎす鳴きつるかたを眺むればただ有明の月ぞ残れる

（ほととぎすの鳴いた方角を眺めると、もう姿はなく、ただ有明の月が残っている）

ほととぎすの声のした方角ではもう姿が消えていたという驚きと、明けの第一声の新鮮な感動とを聴覚から視覚に移る動作を通して詠んだ歌で、月は夜明けにも残っている有明の月で、ほととぎすとの対照性が美しい。

⑩八十六番　西行法師

嘆けとて月やは物を思はするかこち顔なるわが涙かな

（月が私に嘆けといってもの思いをさせるのか、いやそういうわけではない。月にかこつけるようにして、私の涙は流れるものだなあ）

恋の歌で、月は作者に物思いをさせるものとなっており、自分の心を投影するものであったと考えられる。

以上の歌から、

・遠く離れたところでも同じ月を見ているという想像をさせ、故郷や恋しい人を思う時に詠まれる。（「天の原」）
・恋人を長い間待つ象徴や明け方に恋人と別れる場面でとして詠まれる。（「いま来むと」「やすらはで」「嘆けとて」）
・もの思いをさせるものとして詠まれる。（「月見れば」「嘆けとて」）
・美しい月が隠れるのを惜しむ場面で詠まれる。（「夏の夜は」「めぐり逢ひて」）
・月のそのものの美しさを詠む。（「秋風に」「ほととぎす」）
・月を友とみなして詠まれる。（「心にも」）

▼評価のポイント▲　古典文学と月の関係について理解し、今までの学習を生かして月が詠まれた和歌を鑑賞し、昔の人が月に込めた思いについて調べ理解を深めているか、行動を観察し言語活動WSの記述を確認し、分析する。

参考文献

「精選版　日本国語大辞典」小学館　平成一八（二〇〇六）年
「ベネッセ全訳古語辞典」ベネッセコーポレーション　平成八（一九九六）年
「全文全訳古語辞典」北原保雄　小学館　平成一六（二〇〇四）年
「月の名前」高橋順子　株式会社デコ　平成二四（二〇一二）年
「浜島書店　最新国語便覧」浜島書店　平成一五（二〇〇九）年

評価規準

〔知識・技能〕⑴ア
言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解している。
〔知識・技能〕⑵イ
古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解している。
〔思考力・判断力・表現力等〕Ｂ⑴イ
「読むこと」において、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈している。
〔思考力・判断力・表現力等〕Ｂ⑴エ
「読むこと」において、作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めている。
〔思考力・判断力・表現力等〕Ｂ⑴オ
「読むこと」において、作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深め、我が国の言語文化について自分の考えをもっている。
〔主体的に学習に取り組む態度〕
進んで『竹取物語』に描かれた人物の心情などを読み取り、古典文学と月の関係について理解し、今までの学習を生かして、月が

詠まれた和歌を鑑賞し、昔の人が月に込めた思いについて調べ、発表しようとしている。

◎学習指導要領の言語活動例との関連
〔思考力・判断力・表現力等〕Ｂ⑵オ

（植田　敦子）

言語活動ワークシート　記入例

◆教科　言語文化　古文編　単元の言語活動３

◆月が詠まれた和歌を鑑賞する

課題　月の呼び名を調べ、月が詠まれた和歌を鑑賞してみよう。

1 月の呼び名を調べてみよう。

①「陰暦月齢表」（三五八ページ）を見て、日付ごとに月の呼び名がどのように変わるか、確認する。

②「立待月」「居待月」「臥待月」の呼び名の意味を調べる。

立待月	陰暦17日の夜の月で、「立ちながら待つうちに出てくる月」の意。およそ19時頃出てくるため、「立ったまま待つ間にほどなく出てくる月」というところからついた呼び名。
居待月	陰暦18日の夜の月で、この夜の月の出は20時頃で遅く、座してその出を待ったところから出た名前。
臥待月	陰暦19日の夜の月。この夜の月のでは21時頃で、「出るのが遅いから伏し（寝て）て待つ月」の意。

③「有明の月」とは、どのような月を言うのか、調べる。

有明の月	陰暦16日以降の、夜明けに空に残る月のことを言う。夜更けに昇ってきて、夜明けまで西の空に残っている月。

2 次の『百人一首』の和歌ア～ウについて、①～③の手順で鑑賞してみよう。

ア　月見れば千々にものこそかなしけれわが身一つの秋にはあらねど　（二十三番　大江千里）

イ　有明のつれなく見えし別れより暁ばかり憂きものはなし　（三十番　壬生忠岑）

ウ　夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月宿るらむ　（三十六番　清原深養父）

①六つのグループを作る。グループA・Bのメンバーはア、グループC・Dのメンバーはイ、グループE・Fのメンバーはウを「持ち歌」とする。グループ内で「持ち歌」について、「現代語訳」「月がどのようなものとして詠まれているか」を話し合い、文章でまとめる。

②グループを解体し、「持ち歌」ア・イ・ウのメンバーを必ず含む新しいグループを作る。新しいグループ内で、①でまとめた各自の「持ち歌」についての文章を発表する。

③ア～ウを比べた感想を新しいグループごとに発表する。

◆ア「月見れば千々にものこそかなしけれわが身一つの秋にはあらねど」の歌

現代語訳	月を見るといろいろと悲しさが感じられることだ。私一人を悲しませるために秋が来るのではないけれども。
月はどのようなものとして詠まれているか	月は物思いをさせるものとして詠まれている。

◆イ「有明のつれなく見えし別れより暁ばかり憂きものはなし」の歌

現代語訳	夜が明けてもそっけなく空に残る有明の月のように、あなたが無情で冷淡に見えたあの暁の別れ以来、明け方ほどつらいものはない。
月はどのようなものとして詠まれているか	女のつれない態度を有明の月に託している。

◆ウ「夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月宿るらむ」の歌

現代語訳	夏の夜は短く、まだ宵だと思っているうちにもう明けてしまったが、それではいったい雲のどの辺りに宿っているのだろう。）
月はどのようなものとして詠まれているか	美しい月が夜明けが来て光が薄れるのを惜しんでいる。

3 『百人一首』の中から、ア～ウ以外で月が詠まれた和歌を一首選び、「月がどのようなものとして詠まれているか」について考え、鑑賞してみよう。

◆『百人一首』で月を詠んだ和歌

選んだ和歌と作者	現代語訳	月はどのようなものとして詠まれているか

【発展】
他の人があげた『百人一首』で月を詠んだ和歌では、月はどのようなものとして詠まれているか、わかったことをまとめよう。

例

・遠く離れたところでも同じ月を見ているという想像をさせ、故郷や恋しい人を思う時に詠まれる。（「天の原」）
・恋人を長い間待つ象徴や明け方に恋人と別れる場面でとして詠まれる。（「いま来むと」「やすらはで」「嘆けとて」）
・もの思いをさせるものとして詠まれる。（「月見れば」「嘆けとて」）
・美しい月が隠れるのを惜しむ場面で詠まれる。（「夏の夜は」「めぐり逢ひて」）
・月のそのものの美しさを詠む。（「秋風に」「ほととぎす」）
・月を友とみなして詠まれる。（「心にも」）
・白雪を月に見立てる。（「朝ぼらけ」）